
袁紹的惡夢行

青蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

袁紹的悪夢行

【Zコード】

N4661W

【作者名】

青蓮

【あらすじ】

かつて2ちゃんねるの「袁紹の一曰」スレで連載していたホラー小説の転載です。三国志を知らない方でも、ホラーが好きな方ならお楽しみいただけると思います。

三国志の群雄の一人、最も天下に近いと言っていた名門袁家の当主、袁紹。彼は生前の精神的苦痛から魂が割れてしまい、冥界に行けず彷徨い続ける。自分を救ってくれる人を求めて、次々と縁の深い人物を訪ね、行く先々で霧に包まれた悪夢がこぼれ出る。妾腹の子として育った陰惨な過去、歪んだ家族から生まれた狂氣、己と

最愛の母を裏切りながら享受した栄光の代償…それらは恐怖の異界と怪物に変わり、招かれた者に牙をむく。陰鬱な旅路の果てに、袁紹は救いを手にすることができるのか。

プロローグ 袁紹／霧の中にて（前書き）

三国志知らない人も人物の名前が読めれば普通のホラーとして楽しめるはず！なので登場人物の読み方と説明は最初に登場する話の前書きに置いておきます。

逆に三国志が好きでも、血とかクリチャーとか獵奇が嫌いな方はよしたほうがよろしいかと。

袁紹・本初 生年？ 没年202年

後漢の名門、袁家の当主であり一時は河北を支配して天下に最も近かつた男。曹操に敗れて天下への夢を断たれ、心労から病死する。名家の当主ということでお坊ちゃん的に描かれがちだが、実は妾腹の子であり、嫡腹の異母弟である袁術とは対立していた。袁譚、袁熙、袁尚という三人の息子がいる。

プロローグ 袁紹／霧の中に

気がついたら、城は霧に没していた。
寒々しく、先の見えぬ霧に……

私は、どこかでこの感覚を知っている……？

彼は、ぼんやりとわかつた。

毎日毎日、怯えて過ごしていた。

本当の母と引き離され、継母に邪険にされて育つた。

なるほど、娼婦の腹から生まれたから、紹といつねえ。

明日、何をされるか分からなかつた。どんな恐ろしいものが出てくるか、何も見えなかつた。

それでも初めに生まれたから本初だつて？
ふざけるんじゃないわよ！－

頭に響く、ぼんやりとした罵声。

悪夢が、霧の中にこぼれ出る。

「私を助けて！」

袁紹は叫んだ、しかし助けてくれる者はいなかつた。

みんな、継母の持つ名家の威光を恐れて手を出さなかつた。

継母とはいえ、孝行すれば必ず分かつてくれます。

割り切つて、捨扶持だけでももらつとけばいいでしょ。

こんな家の子に生まれて何が不満なんだ、おまえは外を知らないからそんなわがままを言うんだよ。

きれい」とばかり言つて、私の体に刻まれた傷には田もくれずに。

でも、今は私がその名家の威光を着る者になつてしまつた。

今こいつして怪物に襲われているのは、その罰なんだろうか？

血のような体液を撒き散らすミミズかイモムシの化け物。

貪欲に肉を貪る犬の化け物。

顔面に板を貼り付け、ハリセンボンのように釘を打たれたエプロン姿の化け物。

皆、私が憎いのだ。

疎ましくて、殺したいのだ。

そうすれば、彼らは楽になれるかもしないから。

噛まれた瞬間に、彼らの意思が感じられた。

「樂になりたい、樂になつていいい、樂になればいい。」

あれ？

体を引き裂かれる、痛み……しかし、違和感はほとんどない。

ああ、そうか……私はとつぐに、引き裂かれていたんだから。

袁紹は白い石畳を赤く染めて、その場に崩れ落ちた。

プロローグ 袁紹／霧の中に（後書き）

あくまでプロローグなので、まだ具体的な進展がなくてすみません。
次からは、悪夢に招かれた人物との話に移っていきます。

公孫？～易京楼にて（一）（前書き）

ついに袁紹が縁の深い人物を悪夢に招いて、本編の始まりです。最初は袁紹と河北で争つて敗れた公孫？、あまり知られていない人物なので紹介を置いておきます。

公孫？・伯珪 生年？ 没年199年
コウソンサン ハクケイ

後漢末期に河北の一部を支配していた豪族で、袁紹と長いこと戦い続け、一時は優勢であったが押し返されて敗れた。武人としては優秀だが、政治は下手だつたらしい。最期は易京楼という巨大な城砦を作つて籠城したが、袁紹軍が地下道を掘つて侵入したため落城、妻子を殺して自害した。一時的に劉備を配下にしていたことがある。

公孫？～易京楼にて（一）

「はあ、はあ、何とか助かつたか。
しかし、ここはどこだ？」

公孫？は一人、霧に包まれた城の中を歩いていた。
部下はおろか、人が一人も見当たらぬ。

確かに、自分は袁紹軍に攻められて、この易京楼で籠城していたはず。
それからどうなったのか……考えよつとしても記憶がはつきりしない。
この濃厚な霧のように、肝心なところが思い出せない。

（うーむ分からん、袁紹軍は引き上げたのか?
それにしても、静か過ぎる）

とにかく誰か人を見つけなければ……公孫？は市街地に向かって歩いた。

しかし、行けども行けども人の姿はない。

「だ、誰かおらぬのかあ！」

公孫？は不安にかられて叫んだ。

その時、霧の向こうにちらりと人影が見えた気がした。

「あつおい待て！」

公孫？が呼びかけると、その人は立ち止まって振り向いた。

まだ小さな男の子だ。年は、十歳くらいだろうか。

(子供か……事情は聞けぬが、放置する訳にもいくまい)

公孫？は少し落胆しながらも、少年を招き寄せた。
それが悪夢の使者であるとも知らずに……。

袁紹は血と鎧と膿にまみれた世界から、それを見ていた。

ほう、公孫？は”私”を見つけたか。

とりあえず、第一段階はクリアした。
子供を放置したり攻撃したりするようでは話にならない。

しかし、だからといって望む結果が出るとは限らぬぞ。
人はたいてい、裏切るものだから。

少年はかすかに憂いを帯びた笑みを浮かべて、公孫？に歩み寄つた。

「君、何が起こったか分かるかい？」

公孫？はありきたりな質問を子供に投げかけた。
少年はこくりと首をかしげる。

「気がついたら、真っ白で……。
ねえお侍さん、助けて。犬が追つてくるの」

「犬？」

公孫？が耳を澄ますと、確かにどこかで遠吠えのような声が聞こえる。

（おかしいな、籠城のために犬を飼うのは禁止したはずだが……？）

公孫？は首をかしげた。
家を一軒一軒訪ねさせたのだから、犬は一匹もいなはずなのが。

しかし、いるものは駆除しなければならない。

公孫？は未だに日常の考えに囚われていた。

（それに、子供を襲う犬を放つてはおけぬ）

公孫？はちらりとすがつてきた少年を見た。
ふしぎな事に、その顔をどこかで知っているような気がした。

「おぬし、どこかでわしに会つたことはないか？」

公孫？は少年に聞いた。

すると、少年はおかしそうに笑つて答えた。

「当たり前だよ、お侍さんはこの城のお殿様だもの」

民の一人として、どこかで顔を合わせたのかかもしれない。
少年が言つたのはそういう意味だろ？

しかし、公孫？はどうも釈然としなかった。
もう少し訊ねてみようと思ったが、その時間は『えられなかつた。

すぐ近くで、犬の唸り声が聞こえたのだ。

「む、こっちか！？」

公孫？が振り返ると、霧の向こうからのつそりと何かが近寄ってきた。

霧の向こうに現れた影は、大型犬のものだった。
しかし、その姿は犬とはとても思えなかつた。

皮がびりびりに破れて醜くはげ、赤黒い血肉が露出している。
しかも体に有刺鉄線が巻きつけられ、根元はなんと田から出でいる。

さらに、普通の犬ではあり得ないような大きな歯をぎらぎらさせている。

明らかに、公孫？が思い浮かべた犬ではなかつた。

「助けてえ！－！」

少年が青くなつて公孫？にしがみつく。

公孫？は剣を抜いて、目の前の怪物と対峙した。

（な、何なのだこれは……！

このような恐ろしい生き物は、生まれてこのかた見たことがないぞ！－）

犬の怪物は不気味な唸り声をたてて公孫？に飛び掛った。

「グアオ！！」

「せええい！！」

公孫？の振り下ろした剣が怪物の頭を切り裂く。

キヤインと情けない声をあげて、怪物は地面に倒れ伏した。

体をざつくり切られても、怪物はまだ唸り声を立て、びくびくと蠢いていた。

公孫？は怪物を踏みつけ、急いでとどめを刺した。

「な、何なのだこの生き物は……！」

公孫？は思わずつぶやいた。

自分の城の中に、こんなものがいるのが信じられなかつた。いや、この世にこんなものがいるのが信じられなかつた。

公孫？はなぜこんなものがいるのか必死で考えようとした。しかし、答が見つかる訳がない。

公孫？はこれまでの記憶すらほつきりしないのだ。

確かなのは、袁紹軍に攻められて籠城していたことだけ……。それを思い出したとたんに、公孫？は一つの答を思いついた。

「さうか、袁紹のしわざか……！」

思えば、袁紹は悪辣な男だ。

あの男なら、身の毛がよだつような生き物を放つような暴挙に出

てもおかしくない。

(つまり、袁紹はこいつを何らかの方法で城内に放ち、住民はそれを恐れて避難したが袁紹に降つてしまつたと。)

……なんとひどい男だ！－）

公孫？は一瞬でそう決め付けて、憤怒にかられた。

袁紹は血と膿と鏃にまみれた世界で、少し顔をしかめた。
全部が正解ではないが、あまり間違つてはいいことが腹立たしかつた。

ふん、まさかあのよつな愚かな男に気付かれるとはな。
偶然とはいえ、気分が悪い。

自分がこの世界に何をしたか、袁紹にもそれは分かつていた。

公孫？～易京樓にて（一）（後書き）

まず名前が読みにくいですね、すみません。
でも本名がこれだから仕方ありません。

書も溜めてあるといつもでは、早めに投稿していきまや。

公孫？～易京楼にて（2）（前書き）

今回袁紹が招いた人物、公孫？は三國志の中でもかなりマイナーな武将です。しかし、袁紹の戦いの履歴を語るうえではなくてはならない人物でしょう。

公孫？は肥沃な土地を欲した袁紹に騙され利用されたり、その過程で弟を殺されたりして袁紹にかなり恨みをもっています。そんな彼を袁紹はどのような気持ちで悪夢に招き入れたのか… 続きは本文で！

公孫？～易京楼にて（2）

袁紹の感情の揺れに反応したのか、公孫？のそばで少年が泣き出した。

「ううううえーん！！

やだよお、こんなのに殺されたくないよおお！」

公孫？はビクリとした。

こんな状況で泣かれたら、あの怪物の仲間が集まつてくるかもしれない。

「こら黙れ！

わしを殺す気か！？」

公孫？は慌てて少年を黙らせようとした。

しかしその間にも、近くの路地からまたあの化け犬が出てくる。

公孫？は苛立つた。

「黙れ、黙らぬか！！

ええい、こんな足手まといはもう知らぬわーー！」

少年を突き放して転がしたとたん、公孫？は妙な既視感に襲われた。

自分は以前にも、こんな風に味方を拒んだことがある……？

助けに行つてはならぬ！

五百の兵を救つたために、千の兵を失つことになるぞ……！

そうだ、城の外で袁紹軍と乱戦になつて引き揚げた時に、袁紹軍を入れぬために兵の一部を閉め出したんだつた。

損害が増えると分かつていながら、私情に流されて助けに行きたいとすがつた部下の顔が脳裏に浮かぶ。

記憶が戻つたのはうれしいが、これは不快な思い出だつた。

公孫？は腹立ち紛れに少年を犬の方に蹴飛ばした。

(こひいう奴がいるから、事態が悪い方にいつてしまふのだ！－)

助けてと叫ぶ少年に背を向けて、公孫？はその場を後にした。背後から、悲痛な悲鳴が聞こえた。

だが公孫？にとつては、それすら腹が立つだけだった。

おぞましい犬の鋭い牙が、少年の体を引き裂く。

ああ、痛い、苦しい……。

だけど、違和感はない……。

楽になれと急かす怪物を見上げながら、少年は悲しげに笑つた。

やつぱり、あの人では私を助けられないね。

ちょっと期待したのに……

まあ、助けてくれる人の方が珍しいことくらい、もうずっと前から知つていたけど。

少年の体から流れ出した血が、地面をつたのよつて這つ。少し広がるとそれは煙のように消えてしまい、少年の体も消えてしまつた。

あのような男は、さっと地獄に落としちまおう。

血と膿と鏃に埋もれた世界で、袁紹は決意した。

公孫？は、突然悪寒のようなものを感じた。

逃げなければ！

本能が叫ぶ。

さつきより空気が重く、体にのしかかってくるようだ。
武人として磨き上げられた勘が、良くないことが起きると黙つて
いる。

突然、周りの空気が変わった。
気がつけば、さつきは静かだった霧の向こうから不気味な呻き声
が聞こえる。

(な、何が起こった！？
とにかく、城から脱出した方がよい！)

恐怖に急かされるように、公孫？は城の門に向かつて走った。

突然、目の前に人影が現れた。
先ほどはあんなに呼んでも返事すらなかつたのに。

(人、いや、これは……！）

霧の向こうから現れたその姿に、公孫？は立ちすくんだ。

それは明らかに、禍々しき闇から這い出したものに違ひなかつた。

そいつは人の形だけはしていた。

しかし肌は腐つたようにぶよぶよとたるんで、明らかに生きている色ではない。

しかも顔面に血みどろの板が貼り付けられ、釘が打ち付けられている。

服装は召使のようで、妙に上品なのが生々しい。

手には、その上品な衣裳に不釣合いな棍棒が握られていた。

(これは……！)

公孫？は背筋に氣味の悪いなにかが這い上がる思いだつた。さつきの犬はまだ、怪物だと割り切れる。しかしこの人形はどうだ。

幸い顔は板を打ちつけられて見えないが、かすかに息遣いのようものが聞こえる。

まるで自らも疲れきつたように、足を引きずつて近寄つてくる。

気が付けば、人形の怪物は前と横から一體迫つていた。

(やるしかないか！)

公孫？はすらりと剣を抜き、まず横の一体に斬りかかつた。肩から胸を両断して、一撃で致命傷を負わせる。人を斬る罪悪感など、公孫？は持ち合わせていない。

気に食わないものは全て、じつして切り捨ててきたのだから。

(よし、いい調子だ!)

横の一体を始末すると、すぐ前の一体に斬りかかる。

頭から斬り下ろしてから竹割りにし、公孫？はあつといつ間に一体を片付けた。

しかし、歩き出そうとした瞬間、足に鋭い痛みが走った。

「な、何だと!?

倒したと思った横の一体が、足に錐を突き立てていたのだ。

「くそが!!

公孫？は慌てて剣を振り下ろし、怪物ことどめを刺した。
しかし……これはひどくやばい気がする。

もしこれ以上強力なものがいたら、対処できる自信はない。

(早く城から出た方がいい!—)

公孫？は恐怖にかられて、一田散に城門へと走った。

公孫？～易京樓にて（2）（後書き）

もつお氣づきの方もいらっしゃると思いますが、この小説のストレージはサイレントヒルをモチーフにしています。

一人の悪夢から始まり、やがて異世界や怪物が顯在化して他の人間を巻き込んでいく…そして巻き込まれた人間によつて、元にいる人間に変化が起こる。大まかに言えばそんな流れです。

公孫？～易京樓にて（3）（前書き）

話の流れの都合で、今回は少し短いです。
だいたい1000字～2500字くらいを一部として投稿していくつもりですが、内容の切れ目によつてもう少し幅があるかもしれません。

公孫？～易京楼にて（3）

城門にたどり着いて、公孫？は愕然とした。

門がどうしても開かないのだ。

門のつかえ棒が、鎧で塗りこめられたように固まって、いくら力をこめても動かない。

（な、なぜ開かぬ！？）

剣で壊そうとしても、傷一つつかない。

むしろ剣の刃が少し刃こぼれしてしまった。

背後から、また唸り声とも呻き声ともつかない嫌な響きが聞こえる。

またも怪物が現れたのか。

（い、これでは殺される！！）

公孫？はじわりと恐怖にかられていった。

霧の向こうで正体が見えない事が、余計に恐怖をあおった。

（な、何とかして城から出なければ！）

公孫？は城壁に沿つてがむしゃらに走り出した。すると、いくらも行かないうちに、穴があった。地面にぽつかりと、真っ暗な口を開けている。

入るべきか止めておくべきか……。

公孫？は迷つた。

まず頭に浮かんだのは、これが袁紹の罷ではないかといふこと。
それに、自分はこのよつた穴を見たよつた氣がする。

穴から、袁紹軍の兵士が止めどなくあふれてくる。

彼らが火を放ち、城は炎に包まれ、追い詰められた自分は……。

突然頭に浮かんだイメージに、公孫？は思わずよろめいた。

それは、まぎれもなく敗北の記憶だった。

いや、記憶のようにリアルなイメージだった。

この内容は、素直に記憶と認める訳にはいかない。

(もしこれが事実なら、わしづどうして今生きているのだ！？)

公孫？は必死で頭の中の悪夢を否定した。

何が何でも否定しなければ、生きていられなかつた。

とにかく、今は逃げる事だ……。

公孫？は眼前の穴に視線を落とした。

もし今の記憶が正しければ、この穴は城外に通じてゐるはずだ。
ここにいても事態が好転するとは思えないし、だめならまた戻つ
てくれればいい。

「ええい、まよー！」

公孫？は意を決して、穴に飛び込んだ。

血と膿と鏃に埋もれた世界で、袁紹はほくそ笑んだ。

かかつたな、公孫？め！

もうすぐ、あの愚かな男が穴を通りていながらもひつて来る。
悪夢で満たされた、こちら側……。

だいぶ痛い思いをさせてもらひった。
たっぷりお返しせねば。

べとべとに血糊がついた剣を左手に、袁紹は歩き出した。

公孫？～易京楼にて（3）（後書き）

扉が開かなかつたり、道が崩れていたりしてルートが限定されてしまつのはホラーの王道ですね！

公孫？～裏易京樓にて（前書き）

サイレントヒルでは異世界へは穴を通りて行くことが多いですが、この話にも自然な形で穴を登場させることができました。

袁紹がこの城を落とす際に、地道を掘つて幾重にも築かれた城壁を無効化する作戦をとったからです。これだけ防御しておけば大丈夫と思っていたところで、穴から大量の敵兵があふれだしてきたのですから、公孫？にとつては確かに悪夢だったでしょう。

公孫？→裏易京樓にて

公孫？は穴の中をひた走つた。

飛び込んだ穴は、思つた通り地下道のようだつた。暗い地道の先に、光が差し込んでゐる。

(- శతాబ్ది)

公孫は喜んで穴の出でから這い上がった

そこそこが
一處と出られぬ悪夢の體だとも知らずに……

穴から出て体についた土を払つて、公孫？はぐるりと周りを見回した。

一
な、何だこれは！？

外に広がる景色は、先ほどの場所とそつくりだつた。

どうかは分からぬが。

しかし、これは有り得ないと公孫？には分かつた。

中だけのはずだつた。

有り得ないのはそれだけでは無かつた。

空が暗く、夕闇のように赤く染まつてゐる。

霧が重苦しへ、ねつとりと粘りつゝように感じる。

それに……一歩踏み出すると、市街地が骨組みを露にした廃墟のようになっていた。

似てこぬようで、明らかにさつきの場所とは違つ。

(「、これはいかん………」)

公孫？の背中を冷や汗が流れた。

「この氣味の悪さは先ほどの比ではない。
まるで、世界そのものが呪われているようだ。」

(「これはだめじや、早く逃げなけば…」)

出てきた穴に入ろうとして、公孫？は思わず悲鳴をあげた。

「げえつ！？」

驚いたのも無理はない、つい今しがた出てきた穴に土がつまり、
埋まっていたのだ。

自分が出てからまだ一分も経っていないのに、音もなく穴が埋ま
つてしまつた。

(「しまつた、退路を断たれたか！」)

後悔したがもう遅い、公孫？は「この恐ろしい世界に閉じ込められ
てしまつたのだ。

公孫？は剣を抜いたまま、とつあえず歩き出した。

帰れぬものは仕方がないし、ここに留まつても事態は解決しない。

それに、先程の場所と違うならば、出口がどこにあるかもしない。

公孫？の体をなめるよつこ、霧が流れしていく。

少し歩いて、公孫？はふと立ち止った。
目の前に、見たこともない屋敷が立っていた。

(ビリだ、リリは……?)

公孫？は困惑した。

こんな建物は城の中になかったはずだ。
ここはまだ、城の中のはずなのに。

(不思議じや、またに奇怪じや)

さすがの公孫？も気味が悪くなつてきた。
これは本当に現実なのだろうか。

公孫？は恐る恐る、屋敷の壁に手を触れてみた。
感触は……本物だ。

ただ、触つたとたんに毛虫が背を這つた
。不快感が走つたが

公孫？は頭を振つて思い直した。

「ええい、考へても仕方がない！」

これが妖魔の仕業であれば、元を断てば治まるであら」

理解できない事に遭遇したとき、深く考へることを止めてしまつ

のが公孫？の愚かなところだ。

公孫？はあえて妖魔の巣くつむぞましい館に侵入する方を選んだのだ。

来たよ、袁紹。

おつかなびつくり門をぐぐる公孫？の姿を、やつを殺されたはずの少年が建物の陰から見ていた。

公孫？の背後で、門が大げさな音を立てて閉まった。

公孫？～裏易京樓にて（後書き）

この館のステージから、袁紹の悪夢の影が濃くなります。公孫？編はこの辺りで中間地点ですので、ゆるいとおなじくここへださい。

公孫？～憎惡の館にて（一）（前書き）

公孫？と聞いて騎馬隊「白馬陣」を思い浮かべた方にはすみませんが、この話に馬は登場しません。

公孫？のスペックを生かし切れない設定によりお詫び申し上げます。

公孫？～憎悪の館にて（一）

（また閉じ込められたか……）

公孫？は苦々しく思いながら、屋敷の中に歩を進めた。屋敷は外から見たよりも荒んでいた、むしろ人が生活していた氣配さえ見受けられる。

庭木はきちんと手入れされていたし、扉はさび付いているにも関わらずすんなり開いた。

（もう、どうにでもなれ！）

そう思つて中に入ったとたん、口ばかりの顔に出くわした。

初めは、それが何なのか分からなかった。

次の瞬間、その赤黒い穴から吐き出された臭い息で、それが怪物だと分かつた。

「いのつ……」

公孫？は怪物に蹴りを入れつつ、剣を抜いて後ずさつた。

怪物はちょうど人ほどの背丈で、血が抜けたような妙に白い肌をしていた。

舌もない口で、何かもじもじとつぶやいている。

「……ノクセ……」

怪物がつぶやく声が、一瞬言葉に聞こえた。

公孫？は斬りつけるのをひとまずやめ、怪物の声に耳をすました。

「……ショウノ、クセニ……。

キタナラ、イ……ゲセン……クセニ……」

怪物は確かにしゃべっていた。

しかもその声には、あからさまな悪意がにじみ出していた。

(シラウのくせに? 汚らしい? ゲセン?)

怪物が振りかぶる虫の足のような指をかわしながら、公孫?は怪物の言葉を頭の中で訳した。

(将のくせに汚らしい?

下賤だと……わしのことを言つてているのかー)

言葉の意味を理解したとたん、公孫?は頭に血が上った。この怪物は不遜にも、誇り高い武人を汚らわしく下賤だと言つているのだ。

公孫?は猛然と怪物に斬りかかった。

怪物は決して弱くはない、だが公孫?は人の中で抜きん出た武人である。

「はやあー!」

鋭い爪をかがんで避け、怪物の体躯に剣を突き刺す。

怪物が苦痛に身をよじり、嫌がるように身を引いた。

その時、怪物の顔が……いや口元が歪んだように見えた。

何か生理的に毛嫌いするものを退治しあうとする時のような表情。

早く始末したいのに思わず反撃をくらって、触りたくもない嫌悪に必死で避けようとする動きだ。

「ギョ、ギヤ、グヒ……！」

嫌がるように頭を振りながら、泡を食つたように汚い唾を撒き散らす。

公孫？は鎧でそれを防ぎながら、怪物の無駄にふくよかな体を切り裂いた。

怪物は相変わらず、倒しても倒しても現れた。

しかも外にはいなかつた、汚い液を吐くイモムシのようなものまでいた。

絶え間ない緊張にさすがの公孫？も疲労を覚えて、怪物のいない部屋で扉を閉めて腰を下ろした。

「ふう……一休いつまで続くんだ？」

つい、弱音が口をついて出た。
状況は悪くなるばかりだ。

早くこの怪異の元を見つけて倒さなければ、一休ちが疲れ果ててしまふ。

（何か怪異の手がかりのようなものはないものか……）

公孫？は部屋の中を見回した。

外にいるけどどうしても怪物を気にして探索があろうかになつてしまふ。

まうが、じつして密室にしてあればその余裕が生まれる。

そこは、高貴な夫人の部屋のようだつた。

外はあんなに荒れ果ててゐるのに、ここだけが生活感を残している。

宝石をちりばめた化粧箱、よく磨かれた鏡、きれいに整えられた寝台。

いかにも、上流階級の贅沢な女が暮らしていた感じだ。

(袁紹に関係のある女か?)

公孫?は直感的にそう思つた。

袁紹は名門の嫡子、奴の女ならこんな贅沢をしていてもふしきではない。

鏡台の上に、一冊の書物が置かれていた。

「これは……?」

公孫?はそれを手に取つて、読み始めた。

公孫？～憎惡の館にて（一）（後書き）

この部屋の辺りから、袁紹の悪夢要素がふんだんに出てきます。ただし、袁紹のことを（生まれや家族的な意味で）よく知らない公孫？がそれを正しく受け取れるかは別の話ですが。

公孫？～憎惡の館にて（2）（前書き）

正直、公孫？編は出題編のよつたものなので、単なる怪奇現象に終始しているかもしれません。ですが、これに続く他の人物編でいろいろと悪夢の断片が明らかになっていきますので、その時に今回の怪異の答えを探していただけたら幸いです。

公孫？～憎悪の館にて（2）

血と膿と鏽にまみれた冷たい石の床に座つて、袁紹は剣を磨いていた。

刺すよつに冷たい水が、剣についた血糊を洗い流していく。

「公孫？はあの女の部屋に入つたよ」

いつの間にか、少年がすぐ側に来ていた。少年は袁紹の顔をのぞきこんでむさやく。

「本当に君が相手にするのかい？」

あいつはきっと、何も分からないう。

そんな奴と顔を合わせたって、君が傷つくだけだって」

しばらぐ、沈黙が続いた。

「もし、少しでも……」

袁紹がつぶやく。

「少しでも私のことを分かつてもらえたなら、その可能性が針の先ほどもあるのなら……ここは私が出よう。

もし本当に私を分かるつとしないなら、その時までの手でけりをつける」

袁紹は、希望を捨てきれない痛ましい顔をしていた。

少年はあきれたよつにふつと息を漏らし、袁紹の前からどいた。

「仕方ないなあ……言つておくけど、だめでもここにひで諦めたら承知しないからね」

「つむ、分かつてある。

恩に着るぞ」

袁紹は立ち上がり、きれいに磨き上げた剣の素振りをして見せた。

もうすぐあの男がここにやつて来る。

生前の宿敵として、一応礼は尽くすつもりでいた。

公孫？は鏡台の上に置かれていた本を途中まで読み、投げ捨てる
よつに鏡台に戻した。

それは、この漢帝国ができたばかりの頃の歴史書。

しかし、その内容は胸が悪くなるばかりの残酷な物語だった。

そこに記されていたのは、高祖劉邦の妻、呂后の話だった。

皇帝になり、他の女につつを抜かす劉邦を恨み、劉邦が死んだ
とたんに復讐の鬼と化した呂后。

夫が寵愛した女の手足を切り、目鼻をつぶし、人豚と呼ばせた目
をおおうばかりの蛮行。

その章を読み終えたとたん、公孫？の耳元で怒りに狂った声が聞
こえた。

「殺してやる！

あの女に渡すものか！！」

公孫？は大慌てで振り向いたが、そこには誰もいなかつた。

静まり返った部屋の中で、公孫？の心臓だけが早鐘のよつに打っていた。

公孫？は部屋の中に本当に誰もいないのを確かめると、鏡台をあさつて何かないかと探した。

そして、金色に輝く豪奢なデザインの鍵を見つけ出した。

「おお、これで道が開けるやもしれぬ！」

鍵を見つめて喜ぶ公孫？の背後で、一瞬鏡に袁紹の姿が映った。しかし鍵に気をとられていた公孫？がそれに気付くことはなかつた。

公孫？は鍵を手にして一度大きく息をすると、用心深く部屋の扉を開いた。

すぐ側に怪物はいないようだったが、公孫？は思わず息をのんだ。

屋内の様子が、激変していたのである。

床や壁に、血のような汚れがはびこっている。

そのうえ、粘つく膿のようなものがそこらじゅうに落ちている。わざわざきれいだった屋敷は、外と同じような地獄に変じていた。

そして廊下には、公孫？を導くように血痕が長い筋をなしていた。

(これは……来いといふ事か?)

さすがの公孫？も退き帰そうかと思ったが、出口がないであらう

ことは想像がついた。

公孫？は剣を抜き放つたまま、用心深く血濡れの廊下に踏み出した。

あちこちから、怪物の呻き声が聞こえる。

公孫？は怪物を先手必勝で倒し、時にはやりすじしつつ血痕を辿つた。

血痕は、大きな扉の向こうに続いていた。

きらびやかな装飾が、鎧の間からのぞいている。

先は見えないが、それでも入るのをためらわせる威圧感が漏れていた。

「ここが、妖魔の巣か……」

公孫？は腹をくくつて、金色の鍵穴に鍵を差し込んだ。力チリと乾いた音がして、扉の鍵が開いた。

公孫？～憎悪の館にて（2）（後書き）

いよいよ、ゲームでいうボス戦に突入します。
公孫？はどのようなボスと戦い、それが袁紹の何を象徴している
のか…そして戦いの結果はいかに！？

余談ですが、自分は三国志以外にも（主に横山光輝の漫画で）古代中国史を読んでいます。今回のように、またそれとなく作中で出るかもしれません。

公孫？～憎惡の館にて（3）（前書き）

今回の話は主にボス戦ですが、そのさなかに公孫？は失われた記憶を思い出していきます。袁紹の悪夢と公孫？の真実、それがこの戦いのメインテーマです。もつとも、袁紹の悪夢はこれが全てではありませんが、それは他の人物編でおおい明らかになっていく予定です。

公孫？～憎悪の館にて（3）

公孫？が扉を押すと、扉は重い音を立てて開いた。中は暗いが、高い窓から赤茶けた光が差し込んでいる。その光が、部屋中に散らばる血痕をますます際立たせる。

暗闇の奥で、何かが動いた。

「誰かいるのか！？」

公孫？が声をかけると、そいつはのそりと振り向いた。着物はきているが、口ばかりが大きくて、玉に見えるほど肥満した巨体だった。

おああああー

そいつが吼えた。
ちよつと聞くと獣のようだが、かるうじて人間の女の痕跡を残している。

おしゃりいを塗り固めたような白い肌に、血のような紅い口紅が映える。……本当に血かもしけないが。

口・口・ス 口・口・ス 口・口・ス

女の化け物は硬そうな鉄鞭を手にしていた。
恨めしそうな声と共に、公孫？に向かつてそれを振り上げた。

「わあっ！？」

公孫？は慌てて横に飛びのいた。

思ったとおり、入ってきた扉は閉まっている。

鉄鞭が、ガアンと床の石に当たって火花がとんだ。

動きは遅いが、当たればすさまじい威力だ。

女は少しの間動きを止めたが、また重たそうに鉄鞭を持ち上げた。

「コロスコロスあの女をコロス……」

女は公孫？の方を見向きもせずにぶつぶつとつぶやいた。

そのセリフに、公孫？は聞き覚えがあった。

先程、豪華な女の部屋で聞いた声だ。

(そうか、あの部屋はこいつの住処だったか！)

だとすれば、あの部屋にここに鍵があつたのもうなずける。
そしておそらく机の上にあつた書物……その残酷な内容も、こいつに関係しているのだろう。

言動からして、この女も呪詛と同じように別の女を憎んでいるのかもしねれない。

少しその場でまじついて、女は思い出したように公孫？の方を向いた。

しかし、公孫？は振り向いた女の目の前まで来ていた。

公孫？が先制攻撃をしかけたのだ。

「へりえつ……」

上等な絹の帯に、刃がめりこむ。

太い腹から腐ったような体液を撒き散らして、怪物はのけぞった。

「ぎゃあああ！」

獸のような悲鳴を上げて、女はぐだらめに鉄鞭を振り回した。近くにあつた金細工の燭台が宝石を散らして吹っ飛ぶ。

「ああ、もつたいない！」

思わず公孫？が叫ぶと、女はぎりりとこちらで低い声を発した。

マタ、買えバイイじゃナイ
クダラナイ……

それを聞いたとたん、公孫？はピンときた。

(こいつは、元は人間だったな！)

それにこの贅沢さ……公孫？には覚えがあった。

こんな贅沢を平氣でできる奴は、知っている中ではあいつが一番疑わしい。

名門袁家の嫡子にして、河北の富を全て手中に收めつつあったあの気くわない男だ。

「そりか、こいつは袁紹の妻か！？」

公孫？は怪物の正体をそう判断して、一人心の中で納得した。

人型の大口の怪物が言つた言葉も、それを裏付ける証拠だ。

(将のくせに、か……。

そういうえば袁紹の家は三公の家柄、奴はその嫡子だ。
じこの怪物たちは、生みの親によく似たようだな!)

公孫?は剣を構え直し、猛然と女の怪物に立ち向かつた。
妖魔の正体が分かつた以上、ためらう事など何もない。
特に相手が袁紹の妻ならば……望む所だ、奴を苦痛のどん底に叩
き落してやれる。

そこまで考えたとたん、公孫?は妙な記憶の再生に襲われた。

燃え上がる城。

穴から湧き出した袁紹の兵に追い詰められ、
自分は、愛した妻子に自ら刃を向けて……。

「!…ちょっと待て!…!」

公孫?は思わず驚愕に目を見開いた。

自分も最近、妻と子をそうして失つた……?

しかし、それならばなぜ自分はこいつして生きているのか?
どうにも納得がいかない。

(わしは、妻子を……だから袁紹からも妻を奪おうと?)

自分の考えに疑問を抱いて、公孫?の刃が鈍つた。
そのスキを突いて、女が鉄鞭を振り上げた。

ぶんつと風を切る音に、公孫？は本能的に身を引いた。

しかし、左の肩から腕にかけて、容赦なく振り下ろされた鉄鞭が襲い掛かった。

「ぐあつ！？」

公孫？ははつと我に返り、痛みにきしむ体を無理矢理動かして飛びのいた。

今は考えにひたっている場合ではない、この怪物を倒さなければ。

公孫？は一度後ずさりして距離をとると、右腕一本で剣を構え直した。

左腕は衝撃でしばらく使えそうに無い。

ならば、走って勢いをつけて片腕の突きで勝負を決めるのだ。

「ハヤアー！！」

女が鉄鞭を再び持ち上げるまでに、公孫？は剣を上段に構えて走りこんだ。

白銀の刃が、女の胸元に吸い込まれた。

ぎゃあああ

女が悲鳴を上げた。

手足をばたつかせて暴れる女から、公孫？は素早く剣を抜いて離れた。

女の胸から、どす黒い血が吹き出す。

痛みに悶えながら、田体を支えきれずに後ろに倒れこんだ。

しかし、胸を貫かれているにも関わらず暴れる生命力は人間のものではない。

今のうちにとじめを刺すべきだ……。

公孫？はそう判断して、再び女の側にかけ寄つた。

「くたばれっ……」

公孫？は転げまわる女の体に、がむしゃらに剣を突き立てる。激しく暴れて動き回るため、一撃で首を狙うのは難しい。それに、一撃で楽にしてやる理由もない。

(「この女は袁紹の妻……ならば、我が妻子の仇だ！」)

公孫？は鬼のような顔で、女の怪物を斬りまくつた。暗い部屋を震わせて、女の断末魔が響いた。

公孫？～憎惡の館にて（3）（後書き）

さて、ボス戦には無事勝利した公孫？ですが、果たして脱出することはできるでしょうか。

次はいよいよ袁紹本人とご対面です。乱世に争い続けた二人の男は、この異様な世界で何を語るのか…そして袁紹の欲する「救い」は得られるのか。公孫？編もだいぶ終わりに近づいてきました。

公孫？～憎悪の館にて（4）（前書き）

袁紹と公孫？は初めから敵だった訳ではなく、董卓討伐では一緒に戦った仲でした。しかしあはや乱世は治まらず、それぞれが独立して天下を目指すことになったために、領土を巡って争うようになったのです。

その争いのスタート時点で、袁紹は名門の当主として人望があり、すでに優秀な人材を多く集めていました。対する公孫？はそれほど家柄もなく武力でのし上がってきたため、人材も集まらず政治もうまくできません。その辺りで公孫？が袁紹に抱いていた劣等感を感じながら読んでいただけたら幸いです。

公孫？～憎惡の館にて（4）

「はあ……はあ……」

薄暗い部屋に、公孫？の吐息だけが聞こえる。

いつの間にか、床にはびこっていた血の汚れは消えていた。
ちよつと目を離したすきに、女の怪物も消えていた。
部屋の窓から差し込む光は、黄ばみが抜けて白っぽくなつてい
た。

公孫？は放心したように、周りを見回した。

「これは……戻つてこられたのか？」

事態を確認するように、公孫？はつぶやいた。
さつきまでの禍々しい空気はもう感じない。
現世かどうかはまだ不明だが、少なくとも現世に近付いてはいる
気がした。

「ふう、全くえらい目に遭つたわい」

今更ながらそうつぶやいた時、公孫？の耳がかすかな物音を捉えた。

背後から、そつと撫でるような視線が這い上がった。

公孫？は恐る恐る、後ろを振り返つた。
そこに佇む一人の男、その名は……。

「袁紹……！」

よもや見間違えたりするものか。

あの根暗なくせに、どこか人を襲むような田つわ。下々の者との付き合いを面倒くさがるような、けだるい眼差し。

忘れるものか！――

袁紹は、まだ迷いを振り切れぬまま、公孫？と向き合っていた。思えばこの男とも長い付き合いだったが、こうして間近で顔を合わせたのはいつ以来だろう。

「公孫？、私は……」

袁紹は不安と期待半々で、声をかけた。

全部を分かつてもらえる訳がない、だが、少しでも救いが得られれば……。

公孫？は怒りを浮かべた顔で、慎重に歩み寄つてくれる。

「君をこのよくな所に招いたのは、謝ろう。

しかし、私にはどうしても誰かの力が必要……」

ぐわつ

できるだけ感情を荒立てぬよう訴えていた袁紹の声は、じぎれて嗚咽に変わった。

田を閉じて次の言葉を考えていたスキに、公孫？が走りこんで胸に剣を突き立てていた。

「ぐつふつ……！」

あっけに取られたまま咳き込む袁紹に、公孫？は義憤に駆られて怒鳴りつけた。

「貴様、自分の妻をあんなにしておいてよくも涼しい顔でいらっしゃるな。

地獄に落ちて、己が苦しめた者どもに泣いて謝つて……」

（妻だと、何を言つて……あれは私の……。
そうか、そのようにとつたのか）

痛みに縛られて動けぬまま、袁紹は公孫？が責め立てるのを聞いていた。

「袁紹、貴様に人の痛みが分からぬことは以前から分かつておった。貴様は名門袁家の嫡男、権力に虜げられる者の気持ちなど、知らうともしなかったのだろう！

そして名門の威光をかさに着て、とどまる事を知らぬ野望と欲望の果てに妖術にまで手を出したのだ！」

袁紹は痛みに顔を歪めたまま、黙つて公孫？の言つことを聞いていた。

「そしておまえは醜くなつた妻を捨て、他の女に溺れた！
妻をここに閉じ込め、下賤な人間は生きる価値がないとばかりに餌としてここに連れ込んだのだ！

わしはおまえを断じて許さん、天に代わつて貴様の傲慢に罰を下

じりやねりーーー。」

袁紹は、血反吐と一緒にため息をついた。

「いいつけ、私を救えない。

知りうつとする気もない。

ならば、やつれと地獄に落とすとしよう……。

袁紹の顔に、暗い笑みが浮かんだ。

公孫？～憎悪の館にて（4）（後書き）

憎い相手が目の前にいて、しかも異常事態のど真ん中では冷静さを失うのは無理もありません。しかし、そんな時こそ冷静さを保たないと事態は好転しないもの。

サイレントヒル3で、教会でヘザーがクローディアを撃つてしまふとどういう結末になつたでしょうか。ご存じの方も知らない方も、次で公孫？編は最終話ですので、愚かな宿敵の結末をその田でお確かめください。

袁紹／金綱の部屋にて（前書き）

公孫？編もついに最終話です。

ここまでお読みいただいた皆様、長いことお付き合いありがとうございました。

これからも袁紹は他の人物を悪夢に招いていきますので、この先はもつとメジャーな人物が登場するかもしれません。
それでは、公孫？編のラストをどうぞ。

袁紹／金網の部屋にて

「へへへへ……」

場違いな笑い声に、公孫？はぎくじとしてしゃべるのをやめた。袁紹の胸に突き刺した剣から、それに合わせて震えが伝わっていく。

「袁紹、貴様……！？」

公孫？は大慌てで剣を引き抜き、後ずさりで距離をとった。

公孫？は驚愕に目を見開いて袁紹を見ていた。
確かに急所を突いたはずなのに、袁紹は倒れることもなく立つたまま笑っている。

時折ふらつくところを見ると、痛みは感じているようだが、……。

「な、なぜ死はない！？」

公孫？の間に、袁紹は物憂げな顔で答えた。

「いい加減に気付け。

私もおまえも、もうとっくに死んでいるのだ」

袁紹の言葉に、公孫？は思わず目を見開いた。
自分は確かに、今ここに生きているのに。
生きて……？

燃え上がる易京楼。

自ら手にかけた妻子の亡骸に囲まれて、公孫？は兜を脱ぎ捨て

。抜き放つた剣を、自らの首に……。

袁紹の言葉に触発されたように、公孫？の頭の中で失われた記憶が蘇った。

公孫？の体が感覚を失い、ぐらつとよろめく。

そうだ、自分はすでに……あの時、自害したんだ……。

袁紹はそんな公孫？をあきれたような目で見つめた。

「無念の死を遂げた地縛霊は己が死んだ」とに氣付かぬと聞いたが……本当だったとはな。

わしはおまえより数年長く生きたが、もしやと思つて来てみればこの様だ。

未だにこの野望の墓場でもまよつておったとは

公孫？はただ、唇を噛むしかなかつた。

自分で潔く死ぬと思つていたくせに、仇が指摘するまで氣付かぬ自分が悔しくてならなかつた。

しかし、この憎たらしい男に言わればなしでは男として面目が立たない。

公孫？は意地になつて言い返した。

「何を、どうせ貴様も同じようなものだらう…?
結局冥府に行けずにさまよつているではないか！」

それを聞くと、袁紹は妙に神妙な顔になつた。

「むう……確かに結果は同じ事だ。

だがな、わしは未練のあまつたまよつていい訳ではない。

……理由があるのだ」「

「理由?」

公孫?は一応いぶかしげな顔を作つて、聞く素振りを見せた。しかし、心の中では、言葉の中からあら搜しをする気ばかりだつた。

それを読んだのか、袁紹はうそをついたように口を開きかけ……。

「うむ、だがおまえに話す価値はないようだな。

「ぐつ……ゴホゴホゲボオツ……！」

突然、胸を押さえて激しく咳き込み、体を震わせた。

袁紹の指の間から、真紅の鮮血がぼたぼたとこぼれた。吐血したのだ。

それは床に落ちると、まるでそれ自体が意思を持つように広がり出した。

公孫?の足元を飲み込んで、あつという間に血の汚れが部屋中に広がつた。

そしてその血に侵食されるように、石の床は金網に変じていた。

「な、何だと……ー?」

驚いている公孫?の足元で、がんつと嫌な音がした。

公孫？は一瞬、体が宙に浮いたように感じた。だが、体はすぐさま重力に従つて落下を始めた。足元の金網が、外れたのだ。

「うわあああ貴様ああ……！」

袁紹の冷めた視線の先で、公孫？は深淵の闇に飲み込まれていった。

公孫？の姿が見えなくなると、袁紹は思い出したよつて別れの言葉を口にした。

「さりばだ、宿敵よ。

わしを救えぬおまえにもう用はない。

地獄で悪魔の胃袋にでも引きこもつておれ！」

それだけ言つと、袁紹は胸の傷を押さえてその場に座り込んだ。

（痛い……！）れは、かなりかかるな……）

袁紹は唇の血を拭いながら思つた。

自分はもう死んでいるから、どんな傷を負つても死ぬことはない。

ただ、生前と同じ苦しみだけは残つている。

（ああ、やうか……生きていれば、これほど苦しむ前に死ねるのにな）

死人である自分は、苦しみを味わいながら傷が治るのを待つしか

ない。

死ぬことはなくても刺されるべきではなかつたと、袁紹は後悔した。

気がつくと、頭から角を生やした小さな鬼が側に来ていた。小鬼は袁紹の顔を見上げて、驚いたように言つた。

「いやあ、見事に落としてくれたなあ。
旦那さん、なかなかやるねえ」

袁紹は、答えなかつた。

袁紹が黙つていると、小鬼はおどけたように続ける。

「あんた、表の旦那さんやろ?
裏ならともかく、表の旦那さんができるなんて……意外やつたな
あ」

そう、自分はあくまで自分の表層にすぎない。
心の奥の感情は……裏の自分は、今も自分の背後から自分を見て
いる。

袁紹の後ろで、少年が笑みを浮かべてつぶやいた。

「当然だよ、この人とぼくは元々一人なんだもの。
それに、あんな奴は……地獄に落ちて当然、だろ?」

途中から、声が大人のように低くなつた。

少年はいつの間にか、袁紹とそつくりの姿になつていた。

袁紹は背後にたたずむもう一人の自分に目をやり、ふとため息をついた。

「これは自分が壊れないために切り離してしまった自分。少しでも楽になるために、心の深淵に閉じ込めてしまった自分。心の底で、いつも苦痛にまみれていてくれた自分。」

もう一人の袁紹は、体中血に濡れた姿をしていた。彼は表の自分に向かつて、言い聞かせるように告げた。

「まあ、あやつの事はもう氣にするな。
やり方が分かつたら、次を試さねば」

そう、次は救つてもらえる事を祈つて。

「やうだな、いずれにせよこの魂は直さねばならぬ」

袁紹は振り返り、うなずいた。

魂が完全な形でないと、人は冥界に行けない。

袁紹の割れてしまつた魂では、冥界への道が見えない。
だから誰かが自分の全てを許して……抱きしめてくれないと……
……。

救つてくれる誰かを探して、袁紹は易京楼を後にした。

袁紹／金網の部屋にて（後書き）

見事にバッドエンドです、はい。

公孫？はもともと袁紹と仲が悪かつたせいか、見つけるヒントを「ことじ」とく「袁紹が悪い」という方向に曲解してしまいました。いくら力が強くボス敵を倒せても、謎解きができなければグッドエンディングにはいけません。公孫？が袁紹のことを上辺しか知らなかつたのも、一因でしょう。

次は袁紹のことによく知っている人物、息子の袁譚エイタンが登場します。袁紹の悪夢もこの回よりずっと明らかになりますので、ご期待ください。

袁譚・霧の中にて（前書き）

さて、袁紹は今度は息子を招いて新章開始です。

袁紹自身は知っている方もいると思いますが、息子となると知っている方はかなり少ないのでないかと思いますので、紹介を置いていきます。

袁譚・顯思 生年？ 没年205年

袁紹の長男であるが、袁紹が三男の袁尚をかわいがって後継者にと考えていたため、袁紹の死後後継者争いを起こした。袁紹の生前から、本拠地の冀州ではなく青州の太守として遠ざけられていた。後継者争いの最中に一度曹操に降伏し、また裏切って反逆するなど信用できない人間だったようだ。

袁譚へ霧の中にて

我が子を腕に抱き、私は光を見た。

この子が私を見て微笑む顔に、私は救いを見た。

子は無条件に親を愛してくれるのだと、愚かにも信じて……。

だから、私はあまり愛を知らないけれど、一生懸命愛して育てた。

よもや、それすら悪夢に変じる日が来ようとは……。

光を見た後の暗闇は、今までより何倍も暗く、深く、恐ろしかった。

だから私はこの闇を、あの子にも分けてあげようと思ひ。

「道が……見えない……」

白く冷たい霧の中で、袁譚は途方に暮れていた。

(じつじよつ、せつときまで見えていたのに……。
これじゃ、下手すると成仏できないかも……)

袁譚はもうおひと何度も向きを変えて、周りを見回した。

(ただでさえ散々な死に方だったのに、死んでからもこんな目に遭うなんて……)

袁譚は頭を抱えた。

そう、袁譚は死んだ。

敵に攻められ、討死した。

……そして、目の前に見えた光の道を辿つて冥界に行こうとしていた。

問題は、その道を見失つてしまつたことだ。

霧に巻かれたのは、あつといつ間だった。

袁譚の背後から包み込むように霧が流れてきて、気がついたら何も見えなくなつていた。

まるで、悪意ある何かが彼を捕らえたようだ。

白く冷たい霧が、袁譚の体をなぐるように流れる。
その向こうから何かに見られているような気がして、袁譚は思わず首をすくめた。

「ふふ……懐かしいな、私も初めはあのよつと感つたものだ」

血と膿と鏃にまみれた世界で、袁紹はほほえましげにほおを緩めた。

道を見失つて戸惑つ袁譚の姿に、袁紹は自分が死んだ時のことと思いつ出していた。

しかし、全く同じではありえない。

なぜなら袁紹には、初めから道が見えていなかつたのだから。

袁紹が死んだ事に気づいたとき、周りに見えたのは生前と同じ風景だった。

袁紹は自分がどこへ行けばいいのか、何をすればいいのかも分からなかつた。

自分の姿は生きている者には見えない。

声も届かない。

袁紹に与えられたのは、ひどい孤独の時間だった。

袁紹は寂しくなつて、自分と同じように死んだ者を探し始めた。しかしそれは、さらなる孤独へとつながる道だった。

人口の多い冀州の城下町で、死人はそれなりに見つかつた。ただ、彼らの行動は袁紹のそれと全く異なつていた。

皆、何かに導かれるように一方向に歩いていく。

まるで、袁紹には見えない何かが見えているように。

袁紹は必死で後を追つた。

しかし、それは徒労に終わつた。

歩いていくうちに彼らの姿は薄くなり、やがて消えてしまつのだ。

何人目かの死人が目の前で消えた時、袁紹は絶望に泣き崩れた。

自分はきっと、冥界に行けないのだ。

重い罪を犯したせいで……いや、生まれてきたこと 자체が罪だつたのかもしれない。

だからきっと、もうすぐ地獄から迎えが来るのだ。

かくして、袁紹の足元に地獄の住人はやってきた。

それは三歳児ほどの大きさの、頭に一本角を生やした小鬼だった。

それでも袁紹は震え上がり、上ずつた声で小鬼に問つた。

「そなた……わしを地獄に連れてゆくのか？」

意外にも、子鬼は首を横に振つた。

「ちやいますわ、ボクみたいな小鬼にそんな力ありませんもん。取つて食つたりしませんから、安心しなはれ」

袁紹はとりあえずほつと胸を撫で下ろした。
しかし、状況が変わった訳ではない。
それならばと、袁紹は小鬼に尋ねた。

「そなた、わしがなぜ冥界に行けぬのか分かるか？」

それを聞くと、子鬼はおかしそうに笑つて答えた。

「もしかして、自分で気付いてへんのかいな？
旦那さん、魂割れでまつせー！」

「は？」

袁紹は一瞬、言われた意味が分からなかつた。

魂が割れていると言われても、自分の体が割れている訳ではない

し……。

袁紹が戸惑つてゐると、小鬼があきれたように言つた。

「旦那さん、後ろ後ろー。」

言われるままに振り返つて、袁紹は息が止まるほど驚いた。いや、生きていない以上息をする必要はないのだが。

すぐ後ろに、自分とそっくりなものがいた。

袁紹は思わず身を引いて後ずさつた。

しかもそのもつ一人の自分はひどく疲れ、望みを失つたような顔で、そのうえ体中が血にまみれていたのだから。

固まつてしまつた袁紹の袖をつかんで、小鬼がはしゃいだように言ひつけた。

「ほら、あれが旦那さんの魂の片割れや。

最近現世の妖怪たちが狡猾やよつてに、人間さんは魂が完全な形でないと冥界への道が見えへんようなつてしまもん。魂がこないになつてしまもたら、そりやー道は見えへんはずや」

袁紹は小鬼の言つことを頭半分で聞きながら、目の前に立つもう一人の自分を見ていた。

ふいに、もう一人の袁紹が口を開いた。

「無理もない、忘れたかったのだろ? 『
魂を割つて、己の一部を心の底に閉じ込めても……』

もう一人の袁紹が、袁紹に向かって手を伸ばす。

その手が指先に触れた瞬間、袁紹は悲鳴を上げてその場に崩れ落ちた。

その手から伝わってきたものに、

長いこと忘れていた、恐怖と苦痛に耐えかねて。

毎日毎日、怯えて過ごしていた。

本当の母と引き離され、継母に邪険にされて育つた。

明日、何が起こるか分からなかつた。何が出てくるか、全く見えなかつた。

「そうだ、私は……」

三人目の母が楽になる道を示してくれた時、袁紹は迷わずその偽りの道にとびついた。

自分を追い詰めた名家の威光を、自分がまとつて生きる道に。

卑しい生まれを恨み、悪夢に染まつたこの一部を捨てる」とと引き換へに。

よもや、それが死後冥界への道を開ざしてしまつなど夢にも思わぬことだつた。

袁譚／霧の中で（後書き）

袁譚は自分が死んだことを理解している状態で、物語が始まります。

さりに今回、袁紹がどのように今の状態になつたかが語られ、袁紹の目的が明確になつてきました。ただし、目的が見えてもそこにはどう着けるかはまた別の話ですが…。

袁紹～霧の中に（前書き）

袁譚編は、袁紹と家族のことについて語ることが多いため、前章より一話が長くなることが多いと予想されます。また、袁譚以外にも袁紹の一族でキーワードとなる人物が多いため、そのつど紹介を置いていきます。

全体的にも、公孫？編よりもかなり長くなると思います。

袁紹／霧の中に

「旦那さん、辛かつたんやろなあ。
でも、このままやとほんまにずっとさまよひ事になりまつせ～。
そしたらんためには、魂を直さんとあきまへん」

「直せるのか！？」

二人の袁紹の声が重なった。
偽りに逃げていようと、悪夢に埋もれていようと、今の袁紹が願うのはただ一つ。
冥界に行つて安らぎを得ることだった。

「どうすればよい…？」

一人の袁紹が、小鬼に詰め寄る。
子鬼は一人を見比べて、ちょっとひるんだような声で漏らした。

「ああ……」うして見るとやっぱ一人の人間や。
でもなあ、この魂を一つにするには、誰か他の人の力が要るんですわ。

誰かが旦那さんの全てを認めて、許して、生きてていよいよつてくれたらええねん」

「ほ、他の人だと……！」

主人格の方の、表の袁紹は肩を落とした。
姿も見えず声も届かない誰かが、自分を助けられる訳がない。

「何か、手があるのか？」

血塗られた、裏の袁紹はいぶかしげに目を細めた。

「ま、心配しなさんな！」

そないな人には、地獄の力を貸しますわ。

そしたら、現世の妖怪と似た感じで他の人に見えるよつになりますよつてに」

小鬼は楽しそうにそう言った。

「そう、地獄の力を借りて……。」

かくして袁紹はその力で己の悪夢を顯在化させ、他人を引き込む力を得た。

「さて、どうしてやうつか……」

裏の袁紹は境田の向こう側から、霧に囚われた哀れな息子を見つめていた。

体中にまとわりついている血が、うずくよつに微動した。

「やめろ、本初！
今回は私が行く！」

後ろから声をかけてきたのは、表の袁紹だ。

表の袁紹は裏の袁紹を、字で本初と呼んでいた。
裏の袁紹もそれは承諾している。

裏の袁紹が心の深淵に閉じ込められたのは、まだ多くの人が袁紹を字で呼んでいたような年だった。

袁譚が生まれたのは、それからずつと後の「」と。だから袁譚は、表の袁紹がずっと相手をしてきた。

「あの子に寄りそうなら、おまえではなく私だ！」

最後に親として、もう一度あやつの真意を聞くてみたい……。

その言葉を聞くと、本初は懶らしさに笑った。

「ふん、あのよつな男に情けをかける気か？
それとも、まさかあやつが私を救えるなどといつ希望を持つているのではないか？」

「うう……」

図星を突かれて、袁紹は黙ってしまった。

目の前にいるのは自分のだと、改めて思い知らされた。

本初は困惑の袁紹を横目に、ついぞさつしたよつにほやいた。

「つぐづく甘い男だな、貴様は。

あやつの本心がどのよつなものかは、あの夜しかと聞いただろ？」

？

……ああ、分かった、もう勝手にすれば良い……」

袁紹の表情が沈むにつれ、本初も眉間にしわを寄せて頭を抱えた。

やはり袁紹の味わひ辛さも、本初にはもう伝わってしまつた。

い。

「なあばばひなべ。

「だじはてたひひひあ、みはたひひひあ、

本初の許しを得て、袁紹はすぐさま剣を置いて立ち上がった。

久方ぶりに、あの子に会える。

生前ですか、遠ざかろうへて会わなかつたあの子。

袁紹は一瞬、親としての愛情で顔をほほませた。

袁紹～霧の中に（後書き）

袁紹は生前、長男の袁譚を中央から遠ざけていたため、死後内紛の原因を作つてしましました。その理由は三男の袁尚を溺愛したためと三国志演義には記されていますが、この章ではその辺りの原因を妄想して補完してみました。

なぜ袁紹が袁譚ではなく袁尚を選んだのか、その理由を悪夢の一つとして描いていきたいと思います。

袁譚～霧の中にて（2）（前書き）

袁譚の恐怖の旅が始まります。

袁譚は前章の公孫？ほど強い武将ではないため、怪物との戦いで
は少し手こずってしまいます。

しかしそれ以上に、袁譚は怪物たちの中に特別な感情を見出して
しまいます。袁紹の実の息子であり、近しい人物であるがゆえの恐
怖です。これからそれをじっくりと読み解いていきましょう。

袁譚／霧の中に（2）

渦巻く白い霧の中で、袁譚はしばらくまじついていた。霧が晴れるまでは動かない方が良いと思つたのだが、しばらく待つても霧は晴れない。

（いつそ元来た道を戻ろうか……。

あつでも、もうどっちから来たか分からねえ！）

霧は太陽の光すら覆い隠し、一面を薄い灰色に沈めてしまった。方向感覚が狂い、あまりの白さに気分が悪くなつてくる。

そのうち、袁譚の耳をかすかな物音がかすめた。

（人がいるのか！？）

袁譚は飛び上がるほど喜んで、音の聞こえた方を向いた。大方、自分と同じように青州城で戦死した死者だろう。しかし、迷うにしても一人よりは誰かいたほうがいいに決まつている。

「おーい、おーい！」

大声で呼びかけながら、袁譚は音のした方に走った。霧の中で、かすかに動く影が見える。

しかし、それは人間の影ではなかつた。地に伏せ、這い蹲るような……獣の影だ。

(なんだ、人じゃないのか)

落胆とともに、袁譚は足を止めて肩を落とした。

(獣があ……でも、鼻が利く動物の方がこんな状況だと便利かも。臭いを辿つて町とかに連れて行つてくれないかな)

袁譚がそう思う間にも、獣は近付いてくる。

シルエットは、犬のようだ。

しかし、手を差し出さうとした袁譚の表情は一瞬で凍りついた。

「ちょ、ちょっと待て、『冗談だろ……ー?』

袁譚は現れたモノのあまりのおぞましさに、震えながら後ずさつた。

それは、普通の犬ではない。

腐つたように肉が露出して、目から有刺鉄線が生えて体中に巻きついて、

恐怖と狂氣だけを人に与えるような、そんな怪物だった。

犬の怪物は、袁譚を見ると恨めしそうに唸り声をあげた。

袁譚は思わず剣に手をかけ、抜き放った。

しかし、その手はがくがくと震え、まともに振れそうにない。

感じるのだ。

相手は初対面の、しかも犬の怪物なのに、まるで積年の恨みを晴らさうとするかのような深い怨念を。

怪物は袁譚に見せ付けるよつこ、凶悪な牙の並んだ口をかあつと開いた。

その顔が、歓喜に笑つたよつて見えた。

「う、うわあ……！」

袁譚は恐怖に耐え切れず、怪物に背を向けて一囁散に逃げ出した。

後ろから、獰猛な咆哮が追いかけてくる。

「じつと風を切る音と共に、袁譚の肩に鋭い痛みが走った。

「ううう……！」

袁譚は思わず肩を押されて足を止めた。

押された手に、冷たい血がまとわりつく。

怪物は、袁譚の前に軽やかに着地した。

口には、袁譚の着物の破片をくわえている。

袁譚は驚愕した。

袁譚の左肩の鎧は、討ち取られる時に外れてしまっている。

（こいつ、おれの弱点を狙つて……！？）

こんな敵をまともに相手にはしていられない。

しかし、背を向けて逃げたとて同じ田に遭うだけだ。

袁譚は焦燥に顔を歪め、チッと舌打ちして剣を握り直した。

(もういい、どうせおれは死んでるんだ！
逃げながら殺されるよりはマシだ！！)

死んでから殺されるという表現もおかしいが……袁譚は自分で思つておいて苦笑した。

白銀の刃を怪物に向けて、袁譚は意識して呼吸を整えた。

怪物は、とびかかるタイミングを計るように地面を蹴つている。

袁譚は注意深く、剣を正面に構えて怪物に歩み寄つた。

怪物が低い唸り声を立て、身を低くする。

「グゥアオー！」

突如、怪物が再び袁譚の左肩を狙つて飛び掛つた。

袁譚は、思わず身を引いてしまいながら、それでも素早く剣を左に傾けた。

ガツン……と、重い衝撃が剣に伝わる。

怪物の頭が、剣の刃に激突して割れる。

「よし！」

やはり、所詮は獣だ。

袁譚はほつとして、剣を納めようとしたが……できなかつた。

犬の怪物は、割れた頭をもたげてまだ唸り声を上げていたのだ。

(な、何だこいつー？)

袁譚は改めて身體いした。

頭が割れても生きていられる獸なんて、聞いたことがない。

「う、うわあああ早く死ねよおーー！」

袁譚は恐怖に駆られて、怪物を滅多切りにしていた。

ようやく怪物が動かなくなつた時、袁譚は汗びっしょりになつていた。

(何なんだろ? ここには……?)

袁譚はやつと、それが何であるかを考える余裕ができた。しかし、考えたとて答が出るような代物ではない。分かつてているのは、自分は生きている間はこんなものを見たことがないということだ。

だが、そいつの袁譚を見るまゝ、以前から袁譚のことを知つていたようだった。

(……もしかして、生きている人には見えないのかもしない。生きている間に、気付かずに怒らせるようなことをしたのかも)

袁譚の頭で思いつくのは、そのくらいだ。

だが、本当は何を怒らせていたのか、袁譚は全く分かつていなかつたのだ。

袁譚～霧の中にて（2）（後書き）

袁譚は正史では情け深い性格であると記されていますが、演義では残忍で冷酷な性格になっています。この物語では、どちらかといえば演義よりの性格を採用させていただきました。愚かで、感情的で、自己中心的な袁譚…彼がこれからどのような真実に直面していくのか、惨劇的な意味でご期待ください。

袁譚～霧の中にて（3）（前書き）

この章では、袁紹の家族環境が徐々に明かされていきます。

今回、袁譚の会話の中に劉氏リョウシという女性が出てきますが、この人は袁紹の後妻です。袁譚の本当の母ではなく、三男の袁尚の母親で、袁尚を跡継ぎにするよう相当激しく袁紹に迫っていたようです。息子が曹操に追い詰められて殺されても自分はちやつかり曹操に保護されて生き延びている辺り、いろんな意味で女傑だったようです。

袁譚～霧の中にて（3）

それから、袁譚は何度となく同じような怪物に出会った。皆、袁譚を見つけると嬉しそうに尻尾を振りながら襲い掛かってくる。

（「、ここは危険だ！」）

とにかく、ここから離れた方がよさそうだー（）

袁譚は霧の中から響く唸り声から逃げて、できるだけ一直線に走った。

どのくらい走ったんだろう。

袁譚はへとへとになつて、じょとじょと歩いていた。

「グルルル……」

また、近くで唸り声が聞こえる。

見れば、すぐ横に犬のシルエットが浮かび上がっている。

「へ、うわあー！？」

震え上がった袁譚の手を、つかむものがあった。

驚いて振り向いた袁譚の前に、袁譚の腰くらいの背丈しかない子供がいた。

「お兄ちゃん、ひつひー。」

子供の背後には、建物と思しき影があった。

袁譚は子供に手を引かれて、転がり込むよつに廃屋に逃げ込んだ。

慌てて廃屋の扉を閉めて、袁譚ははあはあと荒い息をついた。

「危なかつたね、お兄ちゃん」

子供が、袁譚の顔をのぞきこむ。

その瞬間、袁譚はその子供の顔に懐かしいような感覚を覚えた。

(この子、誰かに似ている……？)

袁譚は思わず、その子供の顔をまじまじと見つめた。

子供の顔には、確実に自分の知っている面影がある。

確かに、自分は以前に、この子によく似た同じ年くらいの子供を見たような気がする。

それは、古い記憶だった。

まだ自分も成人する前、汝南の実家で……。

(そうだ、こいつ袁尚に似てるんだ！－)

その子供の顔には、袁譚の兄弟たちと同じ面影があつた。

それに気づいたとたん、袁譚はその子供に親近感を覚えた。
もしかしたら、親戚の子かもしだれない。

「君、名前は？」

袁譚が聞くと、子供は怯えたように頭を伏せた。

「言わないと、だめ?」

子供は消え入りそうな声で聞き返した。
その目には、深い憂いがある。

「言わない」と、ぶつ?

そこまで言われて、袁譚はようがなになあとこうむりて首を横に振った。

「言いたくないなら、別にいいよ。
じゃあ、質問を変えよつか。

君の姓は、袁だね?」

それを聞くと、子供は少しためりって、かすかにつなずいた。
袁譚の予想通りだ。

(この子はやつぱり、袁家の血を引いてる……。
でも、今生き残っている袁家となると……もしかして、父上の隠
し子?)

袁譚は知っている。

父である袁紹の死後、正妻の劉氏が妾とその子供たちを皆殺しに
したこと。

(あいつといこの子も、そいつやって殺されたか……。

それを逃れて青州に隠れていて、戦に巻き込まれたのかも)

自分は確かに袁紹の長男である。

しかし、袁紹の子供を全て把握している訳ではない。

だいたい、青州の太守にされて遠ざけられてからは把握しようがないではないか。

(つたく、おれを後継者してくれたら、ここ今までひどい事はさせなかつたのに)

そう考えると、腹が立つてきた。

そもそも自分たちがこうなつた原因は、父が三男を溺愛して自分を邪険にしたからではないか。

だつて、自分は今まで父に孝行してきたし。
何も悪いことなんてした覚えがないし。

なぜ自分が邪険にされねばならなかつたのか、袁譚には全く分からなかつた。

「お兄ちゃん、怒つてるの？」

子供が少しだけ距離をとつて、袁譚の顔色を伺ひよひじつぶやいた。

いつの間にか、怖い顔になつていたらしい。

「いや、おまえの事じゃないんだ。
ちよつと兄弟のことを考えててわ」

袁譚は慌てて愛想笑いを浮かべ、子供を安心させるよひよひ組んでいた腕をほどいた。

それでも近寄つてこない子供の顔を、袁譚は改めて見つめた。
やっぱり、自分の兄弟たちに似ている。

(やれやれ、ここも父上の偏愛と劉氏のせいでひどに遭つた
のかな)

もしかしたら、そのせいで怯えているのかもしれない。
袁譚は少し試してみるとおりで、子供に話しかけた。

袁譚～霧の中にて（3）（後書き）

袁譚の記憶として劉氏が兄弟を皆殺しにしたと書きましたが、実はこれは実際に演義にあるシーンです。

劉氏は袁紹の死後、五人の妾とその子供を皆殺しにし、「死んでも袁紹に会えないように」とずたずたに切り刻んだとあります。そんな奥方と毎日暮らしていたら、それこそ袁紹の日常は針のむしろだったと思われます。

袁譚へ廃屋にて（前書き）

袁譚は弟の袁尚と骨肉の争いを起こしたあげく、曹操に滅ぼされてしましました。前回の会話にも、袁尚に対するよからぬ感情がにじみ出ています。袁尚についても、紹介をしていきます。

袁尚・顕甫 生年？ 没年207年
エンショウ・ケンボ

袁紹の三男で最も愛されていたが、袁紹が後継者を決めずに没したため袁譚と争うことになる。曹操に追い詰められて遼東（満州南部）辺りまで逃げ延びたが、助けを求めた先の武将に首をはねられた。

「なあ、おまえは正妻の子?
それとも妾の子?」

とたんに、子供はびくつと肩をすくめた。
驚いて見開いた目に、恐怖の色が浮かぶ。
袁譚は、子供の警戒を解くように語り掛けた。

「正直に言つていいいんだよ、おれは妾の子供だからって殺したりしないから」

それを聞くと、子供はつづむことて、ためらいがちに答えた。

「ほくは……妾の子……」

(やつぱつかー)

袁譚は心中で手をたたいた。
やつぱつ、この子は父袁紹の妾の子なんだ。

ならば、この子をひどこにあわせたのは誰か、すぐに想像はつ
く。

間違いない、劉氏にやられたんだ。

「そつか、それじゃあ、おまえも小さいのに苦労したんだな。
大丈夫だよ、おれは逆らわない奴には優しいんだ」

やつぱつと子供の顔をのぞきこんだとたん、袁譚は思わずびくり

と身を引かかけた。

子供は、心の中まで見透かすような暗い瞳で袁譚を見ていた。

子供が、ゆっくりと小さな口を開いた。

「じゃあ、お兄ちゃんは、ぼくたちをどうするの？」

間延びしたような、心に引っかかる声で、子供は袁譚に問い合わせる。

「殺さないで、どうするの？」

兄弟として、大切にしてくれるの？」

袁譚の背中に、冷たい何かが流れた。

自分がこんな風に質問されるのは、全くもって想定外だ。

子供は、蛇が這いつぶつに氣味の悪い声で、言葉を続ける。

「ぼくを撫でてくれる？

ぼくのお母さんとも仲良くしてくれる？

好きな時に、お父さんとお母さんに会わせてくれるの？」

妙に具体的な例えに、袁譚はようやく答を考え付いた。

この子供が望んでいる生活が、どんなものか分かった気がした。

だが、素直につんとは言えない。

この子は妾の子。

知門袁家を継げる子ではないのだから。

(かわいそうに、まだ小さいから世の中のことがよく分かつてない

んだ…。

ま、いのちとは小さこひに教えてあげないとな。
それが、嫡流の兄の務めだし）

一度、ぐつと睡を飲み込んで、袁譚は自分が思つたとおりの答を口にした。

「殺さないで、せめてこかるよつじめしてあげる。
でも、君のお母さんと仲良くなるとか、こつでも両親に会わせて
あげるつのは無理だな」

その瞬間、子供の目には涙が浮かんだ。

それでも、袁譚は諭すように平然と続ける。

「だつて、君のお母さんおれのお母さんから父上を奪つたのと同じだ。

それに、君は、表に出られないとま、平民の子だら」

血と膿と鏽にまみれた世界で、裏の袁紹……本初は煮えたぎる怒りに頭を抱えた。

さらに表の袁紹から云わつてくる痛みが、千の針のよつて心を刺しうぐ。

「のせつは、かつて自分も言われたことがある。

そして、今のよつて何度も絶望のどん底に突き落とされた。

（おのれ、袁譚め……！

迷うことない、いやつもどうせわしを救つことなどできぬわー。
わしが壊れる前に、わざわざ地獄に落とせ、袁紹……）

袁譚は、突然ひどい眩暈を覚えた。

周りの景色がぐにやりと歪み、平衡感覚がおかしくなる。

ただ、田の前で泣く子供の声だけがいやにはつきりと聞こえる。

うえーん 余わせて お父さん お母さん！

その頃も、耳を貫くような耳鳴りにかき消されていく。

意識を失う寸前に、すぐ近くで父の声が聞こえた気がした。

袁譚……。

それは、深い悲しみと、憎しみのこもった声だった。

袁譚へ廃屋にて（後書き）

袁譚は「当主の嫡子」ところづヒート意識から、「妾の子」を名乗る子供の望みを拒絶してしまいました。

さあ、本格的なサイレントヒルが始まりますよ。

袁譚／霧の中に（4）（前書き）

袁紹と袁譚には、幼い頃の状況に大きな差があります。袁紹が妾の子として疎まれていたのに対し、袁譚は初めから名門の嫡子であり長男だった訳です。二人の育つ環境には、当然のように差が出てきます。

だから袁譚は袁紹の辛さを理解することができません。それが、ここからの惨劇につながっていきます。

袁譚～霧の中にて（4）

どれくらい時間が経つただろう。

袁譚は同じ廃屋の中で、目を覚ました。

さつきの子供が、心配そうにのぞきここんでいる。

「お兄ちゃん、寝ちゃったの……？」

さつきの会話が嘘のように、あどけない表情だ。

「ん、ん……？」

袁譚は、起き上がりつて子供の顔を見つめた。
さつきあんなに泣き喚いていたはずなのに、子供の顔にそんな気配はない。

（夢……だったのか？）

どうも頭がぼんやりしてくる。

子供は、そんな袁譚を気遣うように告げた。

「あのね、お兄ちゃんが寝てる間にね、霧がちょっとましになつたの。

でも、まだ変なのが時々いるから、僕一人じゃ怖くて……」

その言葉につられて、袁譚は窓から外をのぞいた。
確かに、霧は薄くなっている。

白いカーテンの向こうに、別の建物の影が見えた。

しかし、その霧はさつきより、ずっと冷たく感じられた。

霧がほおを撫でたとたん、袁譚はひどい悪寒を覚えてぶるぶると震えた。

(出でにきたくないなあ……)

袁譚は本能的にそう思った。

しかし、ずっとこんな所にいても明らかに明かなことは分かっている。

霧がましになつたなら、とりあえず外の様子だけでも見に行くべきだつ。

「しようがないなあ、あんまり足手まといになるんじゃないぞ」

着物のすそをぎゅっと握つてゐる子供に、袁譚は語りかけた。
平民の子でも一応兄弟なんだから、さすがに放り出す訳にはいかない。

扉を開けたとたん、霧が流れて袁譚の体を撫でる。

視界は多少きくよくなつたが、まだどこからか不気味な声が響いてゐる。

小さな弟を後ろにくつつけたまま、袁譚は白い世界に踏み出した。

廃屋を出ると、そこは建物に囲まれた道の入り口であることが分かつた。

袁譚自身、どうをどう走つてきたのか分からぬが、とにかくここの市街地のようだつた。

「離れるなよ、見失つたらもう面倒見きれないぞ」

部下に命令でもするより言つて、袁譚はすたすたと歩き出した。

子供は袁譚の速さに、小走りでついて来た。

それでも、袁譚が歩く速さを変えることはなかつた。

だつて、なんで名族の自分が平民の子に氣を遣わなきゃいけないんだ。

面倒見てやるだけで、十分慈悲深い兄じやないか。

しばらく歩いて、袁譚はあることに気づいた。

これだけ歩いているのに、誰一人すれちがう人間がない。

街は、また元気ーーストタウンといえるほど静かだつた。

(家の中にはいるのか……？)

でも、大声で呼んだらあの変な犬が集まつてくるかも)

しーんとした空氣の中、袁譚の足音と子供の荒い息遣いだけが響く。

子供はちょっと前から疲れてはあはあ言つてゐるが、袁譚にはどうでも良かつた。

突然、子供の足音が止んだ。

「ん？」

ふしきに思つた袁譚が振り向くと、子供は青ざめた顔で立ち止まつていた。

袁譚は少しこらついて、子供を急かした。

しかし、子供は立ち止まつたまま袁譚のななめ前を指差した。
子供の足は、がくがくと震えている。

「お、お兄ちゃん……それ……」

袁譚が気付いて振り返ると、視界の隅に着物のすそが映った。

(なんだ、人がいたのか)

袁譚は単純にそう思つて、声をかけようと向き直つた。

しかし、事はそう単純ではなかつた。

霧の中から現れたのは、人間のようで人間ではなかつた。

顔に、無数の釘で板が打ち付けられている。

明らかに釘が頭から突き出しているのに、それでも息遣いが聞こえてくる。

それにこの召使のよつた上品な着衣…袁譚には見覚えがあつた。
(馬鹿な、有り得ない……どうして化け物がこの服を着てるんだよ！?)

袁譚の脳裏に、汝南の実家での記憶が蘇る。

名門袁家に仕える、誇り高き召使たち。

ちよつどころな服を身にまとつて、家のために献身的に働いていた。

そして、さすが名門のお坊ちゃんですと袁譚に頭を下げて……。

その感触すら覚えているのに！

袁譚の背中を、嫌な汗が流れ落ちた。
さつきの犬の方がまだましだった。

訳の分からぬ怪物の中に見知った部分を見つけるのがこんなに
怖いことだったなんて、袁譚は初めて気付いた。

怪物は足を引きずりながら、近付いてきた。
手には、血のしたたる包丁を持っている。

(「、殺される前に殺してやるー」)

袁譚は素早く剣を抜き放ち、怪物に斬りかかった。
迷うことなく走りこんで胸に突きたて、そのまま横に振りぬく。
どす黒い返り血が、袁譚のほおにかかる。
きれいな刺繡のスカートをひらつかせて、怪物が倒れた。

(ふん、化け物の分際でー)

袁譚の心に、罪悪感など生まれよはずがない。

だつてこいつらは、尊いこのおれの体に傷をつけようとしたん
だぞ。

その罪は、当然のこと死刑に値する。

それにもし人間だったとしても、こんな下賤な奴らの命など塵
みたいなもんだ。

袁譚「霧の中に」(4)（後書き）

招かれた人物が違つても、出現するクリーチャーは基本的に変化しません。招かれた場所によつて出現するものはありますが、誰がそこに行つても同じ怪物が出現します。

ただし、その怪物をどのように解釈するかは招かれた人物によつて異なります。

袁譚～霧の中戻り（5）（前書き）

出現するクリーチャーには、袁紹の悪夢がこめられています。袁譚は袁紹に近しい人物であるがゆえに、その怪物にこめられたメッセージをかなり正確に読み取ることができます。

袁紹ほどではないにしろ、袁譚も父が妾の子であるとこう状況から過去に不快な思い出をいくつも持っているからです。

袁譚／霧の中にて（5）

だが、塵も積もれば山となるとこいつ言葉を袁譚は知つていただろうか。

子供が、突然震えながら袁譚にしがみついた。

「お、お兄ちゃん……後ろ、横も！」

はつと気がついて周りを見回せば、霧の向こうから同じような化け物が次々と歩いてくる。

幸い動きはのろいようだが、この数には恐怖を覚えた。

子供を突き放したのは、ほぼ反射的な行動だった。

「自分の命ぐらう自分で面倒みろ！」

そう言い放つや否や、袁譚は子供を置いて走り出した。

こんな子供を連れていたら、怪物に捕まつて殺されてしまつ。

おれは名門袁家の当主なんだぞ。

「こんな下賤の血が入った袁家の恥に付き合ひ落とすような安い命は持ち合わせていらないんだよ。

背後で、かん高い子供の悲鳴が響く。

普通の人なら後ろ髪を引かれるこの声にも、袁譚の心が揺れることはなかつた。

子供は、去つていいく袁譚の後姿を呆然と眺めていた。

期待はあまりしていないつもりだった。

しかし、じつして衝撃を受けてみると、やつぱり自分は息子への期待を捨てていなかつたのだ。

怪物たちが寄つてきて、次々と刃物や鈍器を振り下ろす。

「楽になりたい、樂になつていい、樂になればいい」

違和感のない痛みの中、子供の意識が薄れしていく。

生きていたことは、死ねば永久に意識を失うのだから、樂になれると信じていた。

だから、自分を殺せば自分は樂になれるのだと……。

この怪物たちは、そういう負の感情から生まれた。

結局は、自分を終わらせたがる自分の一部だ。

死んでもなお自分を殺そうとやつてくる辺り、やつぱり自分と同じようであきらめが悪いようだ。

(でもね、僕は今で分かつたよ。

あきらめないと、どうしようもないことだってあるんだ……。

それをあきらめることだが、どんなに辛くても……ね)

子供の体から流れた血が、霧に溶けるように消えていった。

どのくらい逃げ回つただろうか。

袁譚は霧に包まれた市街地をとぼとぼと歩いていた。

怪物は、倒しても倒してもきりがない。

街から出ようとと思っても、逃げるのに精一杯で方向など把握す

るひまもない。

そのつえ、さつき子供を見殺しにしてから、なんだか空気が重くて余計疲れが増してきた。

「はあ……はあ……一体いつまで続くんだよ？」

聞く人も無いのに無意味にぼやいて、袁譚はふと足を止めた。袁譚はいつの間にか、大通りに面した角に立っていた。

その大通りの風景に、袁譚は懐かしいものを感じた。

（あれ、おれはこんな通りを前歩いたことがある……？）

霧に包まれてはっきりとは見えないが、確かに袁譚の記憶と重なる部分があった。

もつとも、その記憶自体もかなり昔のことなので、薄い霧がかかっているようなものだが。

まだ袁譚が幼い頃、袁譚は両親に連れられてこの通りを歩いた。父袁紹と、若くして死んだ実の母に連れられて……。

あのころは、あんなに仲のいい家族で、幸せだったのに。

どこのからおかしくなったのだらう？

今更答を出しても、遅すぎる話ではあるが。

ただ、今袁譚がいるこの通りは、汝南にある実家の近くにあった」とは確かだ。

（おれはいつの間にこんな所まで来たんだろう？）

袁譚は思わず疑問を覚えた。

自分は、青州で死んだはずだ。

それがこんな短時間で、汝南まで来られる訳がない。

「これは、本当に現実なのか……？」

そんな疑問が袁譚の頭をかすめた。

街には人が全くいない、現実のようでは実は違うのかもしれない。

その疑問をむりに濃くするようなものが、目の前に現れた。

「これ、おれの実家だ……」

大通りを歩いていくと、思い出のとおりの場所に、汝南の実家があつた。

今はもう、戦乱に巻き込まれて、そのうえ袁氏を滅ぼさんとする攻撃のせいではなくつていたはずなのに。

実家は、思い出のとおりにきれいなままでそこにあつた。

（どうしよう、入つてみようか？）

袁譚は迷つた。

袁譚は怪物に追いかけ回されて、かなり疲れている。

ここに入つて門を閉めれば、一時のやすらぎを得られるかもしれない。

（でも……）

それでも袁譚の胸には、底知れぬ不安があった。

この場所は現実にないはずの場所、入つたら何が起こるか分から

ない。

外見だけ昔のままでも、中まで同じかどつかは分からぬ。

そして何よつ袁譚をためらわせるものか、その家から発せられたる不吉な気配だ。

霧はその家から立ち上つてこるよつで、袁譚を招ひりとするよううに揺れる。

家の門は、歓迎するように全開になつてこる。

(えいじゆうが……?)

このことじゆうぢ決断できなじのは、父ゆずりの優柔不斷な性格のせうだらう。

やうして迷つたあげくにえりませにまつてしまつといふも、また

……。

考え込んでいる袁譚の背後で、かすかに犬の唸り声が響いた。

袁譚は飛び上がり驚いた。

「ひゃあああー!?

すうとんきょううな悲鳴を上げて、袁譚は思わず田の前の門に飛び込んだ。

そして慌てて門を閉めよつとしたとたん……門はまるで意思あるものよつて、勝手に勢いよく閉まったのだ。

「あっ……!」

袁譚は実に間抜けな声を上げたが、もう遅かつた。
押しても引いても、門は石のように微動だにしない。

霧が、袁譚を包むように包めいた。

もう逃がさない。

もう放さない、と。

袁譚は「」の軽率な行動を後悔したが、もう後の祭りだった。

しかし、これから袁譚が味わう事になる後悔に比べれば、こんなものはまだ序の口だった。

袁譚～霧の中にて（5）（後書き）

袁譚は子どもを自分の親戚であると認識していくながら、見捨てて逃げてしましました。前章の公孫？にとつて見捨てた子供はあくまで他人だったことを考慮すると、袁譚のほうがむしろ悪質であるといえます。

つまり、それだけ袁紹の怒りとこれらからの悪夢も公孫？よりずっとひどいものになるということです。

袁譚へ梅辰の館にて（一）（前書き）

さて、袁譚が悪夢の館に閉じ込められてしましました。

公孫？編でも悪夢の館は出てきましたが、今回の館はそれとはまた別です。袁紹が悪夢を顯在化させた館は複数あり、それぞれに含んでいる悪夢の成分が異なります。それでも共通のクリーチャーは出現するので、今回は公孫？編で出現したクリーチャーの言葉を袁譚が正しく訳してくれます。

袁譚の梅娘の館にて（一）

袁譚は、ともかく家中を歩き回ってみることにした。
あれだけ固く門が閉まつていれば、外の怪物は中に入つては来ら
れないだろう。

ならば、外に出る方法は休みながらゆづくつ考えればいい。

しかし、その甘い考えはすぐに打ち破られた。

怪物は、家の中にもいたのだ。

しかも外にはいなかつた、口がばかでかい人型の怪物までいた。

それはぼろきれのようにに破れ果てた着衣をまとつた、白けた肌の
怪物だつた。腐つたような臭いのする息とともに、モ、モ、モと何かをつぶやく。

「シヨウのくせー……けがらわシイ……」

それを聞いたとたん、袁譚の頭の中で古い記憶がフラッシュバックし
た。

怪物が何を言つてゐるかは、瞬時に解読できてしまった。

娼のくせに、汚らわしい！

それは袁譚が幼い頃、汝南の実家で聞いた言葉だ。
まだ袁譚が物心ついたばかりの頃、つい遅くまで起きていた時に
偶然耳にした。

袁家の重鎮である白けた肌で太り氣味の男が、父に向かつて言い

放った言葉だ。

娼つて、何？

なんで父上が言われるの？

それからしばらくして、袁譚は父の本当の生まれを知った。

父は袁家の当主、袁成の嫡子ではない。

本当は、袁逢が娼婦に産ませた子供だったんだ。

それを知ったとたん、袁譚は体中をかきむしりたいほど嫌悪感に襲われた。

あんな汚らわしい下賤の血が、自分の体にも流れている……？
生まれた時から袁家の嫡子として育ってきた袁譚には、耐え難い屈辱だった。

そのやり場のない怒りは、自然と父に向かった。
すなわち……父上が自分を汚したんだ、と。

それから袁譚は、心の底で父を軽んじるよつになつた。
ただ、現状で父に逆らうとまづこの表には出さなかつたはずだが……。

怪物の言葉は、袁譚にとつてこの上なく不快な記憶を呼び起しこせた。

袁譚は激昂して、怪物の口に剣を突っ込む。

「人間じゃないなら黙つとう……」

しかし、怪物は喉を貫かれながらも、鋭い爪で袁譚の体を引っか

いた。

幸い胴体は鎧が覆つてるので大した傷にはならないが、袁譚はひどい恐怖を覚えた。

生命力もさることながら……怪物の自分を傷つけようとする執念が恐ろしかった。

「はあ……はあ……ちくしょうーーー！」

袁譚は夢中で怪物を切り刻んだ。

さつきの召使の怪物といい、なぜこの怪物たちは自分の過去を掘り返すのだろう。

見ず知らずの化け物の方が、よっぽど気楽だったに違いない。

(こつこつ)の出所は、一体……？)

それを考えると、袁譚は身の気がよだつよつな感覚に襲われた。この怪物たちを生み出している者がいるとすれば、そいつは袁譚の近しい人物であるに違いない。でなければ、どうしてこんな手の込んだ嫌がらせができるものか。

(袁家に恨みをもつ人物……か……?)

袁譚は反射的にそう思った。

だが、それが自分の家族だとは思わなかつた。

自分をひどく苦しめるこの悪夢が、よもや自分を生み出したのと、

同じ親から生み出されたなどとは……。

袁譚は、館の中を歩き回った。

館の中はだいたい袁譚の記憶に似通っていたが、異なる部分も各所にあった。

例えば、庭に植えられた木が小さかったり、自分の部屋がなかつたり。

まるで、袁譚がいなかつた時のように。

袁譚の存在とつながる痕跡はことじごとく存在しなかつた。

(何だ、これ……?)

(ここは、おれがいない袁家……?)

そんな中、袁譚は祖母の部屋を見つけた。

その部屋は、雰囲気的に老人の部屋とは思えなかつた。

一言で言えば、若いのだ。

(違う、おれが知ってるこの部屋はこんなんじゃなかつた!)

ただ、祖母にも若い頃があつたことは袁譚の頭でも想像がついた。

もしかしたら、ここを生み出した主は、過去の袁家を知っているのかもしれない。

その部屋には、怪物はいなかつた。

袁譚は休憩も兼ねて腰を下ろし、ふとそばにあつた手紙に手を伸ばした。

筆跡は、間違いなく祖母のものだ。

<袁達様へ

率直に申しますと、私はあの子を甘やかしたくなかったのです。あの女のようこ、ただ暴力を振るつた訳ではありませんわ。

あれは、れっきとした嬪の一環なのです。」

袁譚には意味の分からぬ内容だつたが、袁譚はとりあえず読み進めた。

「私もできる事なら、あの子を傷つけたくはありません。でも、あの子はあの娼婦を思つて泣き叫ぶ限り、名門の御生にはなり得ませんわ。」

私はあの子の幸せを思つて、心を鬼にしてゐるのです。」

袁譚にも何となく雰囲気は分かつた。

祖母は、名族にふさわしくない行動をする子供を正しくしつけうとしているのだろう。

なぜ死んだ祖母の手紙がここにあるのかは、想像がつかないが。

おかしいといひは他にもあつた。

袁逢様……それは父袁紹の実父であり、袁譚の祖父である。彼は、袁譚が幼い頃にとっくに他界しているはずだ。

だとしたらこれは、過去の手紙？

（だつたら、あの子つて……！）

袁譚の背筋に寒気が走つた。

祖母のいうあの子という存在に、袁譚は心当たりを覚えてしまつた。

「うわあああ……」

袁譚は叫び声をあげて、弾かれたように部屋から飛び出した。もう一時も、あの部屋にいたくない。

あの手紙の内容を想像すると、気が狂つてしまいそうだ。

（そんなはずない！）

父上は半分平民かもしけない、だけど……心は生まれながらにして高貴なはずなんだ！

おれの父親は名族の当主なんだ、娼婦みたいな人間のクズのため泣き叫んだりしないんだよ！！）

袁譚は湧き上がる疑念を……確信に変わる前に振り払って走った。

生まれながらに名族のお坊ちゃんであつた袁譚には、父のそういう態度が不快で許せなかつた。

袁譚／悔恨の館にて（一）（後書き）

今回の館は袁紹が最終的に落ち着いた三人目の母がいる家です。そのため、元になつた家は自動的に袁紹に受け継がれ、そこで袁譚が生まれました。つまり、この館は袁譚と袁紹の共通の思い出が詰まっている訳です。

次回では、ついに袁譚が父袁紹と対面を果たします。

袁譚へ悔恨の館にて（2）（前書き）

よつやく袁紹と袁譚が対面を果たします。

しかし、ここまで読み進めた方は知つてのとおり、袁紹は表と裏の一人に分かれてしまっています。ここで袁譚の前に現れた袁紹は、果たしてどちらなのでしょうか？ストーリーの流れと会話から推理してみてください。

袁譚／梅娘の館にて（2）

わき田もふらりと走つてゐると、たいていろいろな事にならない。袁譚はいくつ田かの角を曲がつたとたん、何かに足をとられて派手に転んだ。

「いった……てこゝか、臭い！――」

袁譚の足にからまつていたのは、人の足ほどに太い＝＝＝ズのような怪物だった。

そしてそれは、鼻が曲がるほど臭かった。

まるで、その場所一帯が廁になつたような臭いだ。

怪物は頭をもたげて、口から糞尿の臭いがする液体をばらまいた。

「うぶつー？」

思わず口を押さえた袁譚の周りに、ぼたぼたと赤黒い液体が降り注ぐ。

あまりの悪臭と屈辱に、袁譚は世界が歪むような眩暈を覚えた。

何で、自分がこんな田に遭わなきやいけないんだ。
おれは、何も悪いことした覚えなんてないのに。

袁譚はもう、逃げるしかなかつた。

普通に攻撃してくるならともかく、これはすさまじく陰湿だ。

相手の体を傷つけるのではなく、

相手の心をすり減らして折るためだけの攻撃。

生まれながらひな門の長男であつた袁譚には、今まで全く縁のないものだつた。
いや、少なくとも自分がされたのは初めてだつた。

袁譚は息がきれるまで走つて、まつめうの体で開いていた部屋に逃げ込んだ。

「ちくしょー、何だよあいつは……！
このおれに、あんな屈辱を味わわせやがつて。
おれは別に悪いことなんとしてないんだよー。」

それに応えるように、部屋の奥から幼い声が響いた。

「悪いことしないても、やられることはあるよ。
だつて『ぼくは、実際にああいつに遭つたんだから』

声のした方に田をやって、袁譚は愕然とした。

「お、おまえ……じつじつ……？」

そこにいたのは、つこひつき袁譚が見捨ててきた子供だった。
確か、怪物に囲まれたまま放り出して、断末魔を聞いたような覚えがあるが……。

あの状況から、じつやつて逃げ出してここまで来たというのか。
それも無傷で。

だが、袁譚にそこまでのことを考へる頭脳はなかつた。

袁譚の心にわき上がつたのは、いらぬ心配をさせられたといひ理不尽な怒りだつた。

袁譚はにわかに憎たらしい顔をして、子供をののしり始めた。

「おい、てめえ逃げ道を知つてやがつたな！？」

だつたら、なんでおまえより尊いこの兄を連れて行かなかつたんだよ！」

兄弟の命を何だと思つてやがる……。」

自分が兄弟と思しきこの子を捨てて逃げたことなどすつかり忘れて、袁譚は子供を責めた。

しかし、子供はさつきのよつた弱氣ではなかつた。

「ええー、だつて、先に逃げたのはお兄ちやんじやん？」

まるで袁譚をからかうよつて、意地悪く言つて返してくる。

袁譚のことなどまるで敬つていないので、人を小ばかにした表情。

袁譚は、血業血得にも関わらず一瞬で堪忍袋の緒が切れてしまつた。

「てんめええー！！！」

袁譚は大人気ないほど激昂して、子供につかみかかつた。

しかし、袁譚の手が子供に届くことはなかつた。

さつき街中の廃屋で経験したあの感覚……世界が歪むよつた感覚が袁譚を襲い、阻んだ。

周りの景色がぐにゅりと歪む。

袁譚はひどいめまいを覚えて、立つてもいられず床に這いつくばった。

そんな袁譚の皿の前で、子供は平然として口を開いた。

「あーあ、やっぱり徹底的にだめだなあ……」

「こんなのが後継者に」と瞬でも思つた自分に反吐が出せつだ

「な、何、言つて……？」

袁譚には、子供の言つている意味が分からなかつた。
だつてこの子は自分の兄弟で、後継者争いとかそういうのには加わる資格もないはず……。

その間にも、部屋の異変は進行していく。

きれいだつた壁や床が腐つたようにぼろぼろになり、血のような汚れがはびこつていく。

子供の足元を中心に、穢れた血が意思あるように流れ出す。

「おまえの頭の悪さは分かつてゐつもつだつたけどね。
こくつひとつを出しても、結局ぼくが誰なのかは分からずじまい
でさー！」

その言葉に、袁譚ははつとして子供を見上げた。
子供の体が歪み、だんだん大きくなつていく。
それと同時に、声も徐々に低く、大人びていいく。

「私は確かに妾の子、だけどおまえの兄弟などではないよ。
おまえの体には、直接私の血が流れているんだから。

だって私は、おまえの……」

お父さんなんだから

袁譚へ梅根の館にて（2）（後書き）

さあ、館が裏世界に変貌しました。

サイレントヒルでも、表世界より裏世界の方が危険度は増しますが、その分悪夢の主の心を強く感じ取ることができます。この血塗られた世界で袁譚は何を感じ取り、どのような真実に直面するのか……恐怖もシナリオも加速して、そろそろ中間地点です。

袁譚へ悔恨の館にて（3）（前書き）

袁譚は前章の公孫？よりだいぶ力が弱く、かといって頭もあまりよくありません。しかし、袁譚は袁紹と血のつながりがあるため、袁紹も何も知らせずボス敵と戦わせるようなことはしませんでした。そんなことをすれば、袁譚が負けることは目に見えているからです。袁紹たち死人は、肉体的ダメージを受けても死にはしませんが、体がある程度再生するまで行動不能になってしまいます。そういう意味では、悪夢の主を擊破するという選択肢も脱出を目的とするなら有効といえるでしょう。

袁譚／梅根の館にて（3）

袁譚の手をついている床は、さわきまでのきれいな床ではありえなかつた。

木が腐り、ほこりが積もり、さらに血のよつたシミが一面にほびこつてゐる。

「ちよ……待つてよ、そんな……！」

しかし、何より袁譚を震え上がらせるのは、周りの変化ではなかつた。

袁譚は、目の前に立つ者の姿を驚愕の表情で見つめていた。

それは、袁譚がよく知つてゐる男だつた。

「嘘でしょ、こんな……！」

それは袁譚が人生の大部分を共に過ごして來た近しい人。
この世に袁譚を生み出してくれた、かけがえのない存在の片割れ。

袁譚の目の前に佇むそれは、父である袁紹その人であった。

袁紹は、凍てつくような冷たい目で袁譚を見下ろしている。
その体は血にまみれて、どす黒い氣配に満ちている。

袁紹は動けない袁譚に向かって、怒りのにじんだ笑みを浮かべて
言つた。

「久しぶりだな、譚よ。」

いや、初めまして……と言つておひつか。

おまえは表のわししか知らぬであつからな

そり、これは裏の袁紹だ。

袁譚の知らない、袁紹のもつ一つの心だ。

やつをあつさつと見殺した子供……表の袁紹とは、似て非なる存在だ。

「父上……なのですか？」

袁譚はやつとのことで、父に向かう言葉を紡いだ。

田の前にいるものは確かに父の姿をしている。

しかし、表情や雰囲気は自分の知る父とはかけ離れている。

「ああ、そうだ。

名家の建前が邪魔で表には出られなかつたが、ずっとおまえを見ておつたぞ」

袁譚には、父が何を言つているのか分からなかつた。

ただ、これが自分の知る父ではないことは感じられた。

袁譚は、勇氣を振り絞つて田の前の父に声をかけた。

「あなたは、本当に父上なのですか？

本当に父上なら、なぜおれをこんな田に遭わせるのですか？」

袁譚の率直な疑問に、袁紹は一ヤリと口角を上げた。

「の、の、譚よ。

わしがなぜ未だに彷徨つておるか分かるか？

」

わしはな、訳あつて死んだ後に冥界への道が見えなかつたのだ

袁譚の質問に対する答ではない。

だが、それでも袁譚は聞き耳を立てた。

(冥界への道……おれが死んだ直後に見たあの光の道のことか?)

なまじ実体験があるだけに、無視はできない言葉だ。

袁譚もそれを見失つてここに来たのだ。

もしかしたら、父はそれにに関する何かを知つてゐるのかもしけない。

「譚よ、わしは生きている時、辛いことがあつて魂が割れてしまつたのだ。

おかげで、冥界への道が見えず彷徨つはめになつた」

袁紹は遠い目をして、悲しそうに告げた。

「辛くて、苦しくて、それでもしなければ生きていけなかつたのだ。

だが、この魂を直さねば冥界には行けぬ。

誰かが、このわしのありのままを認めて、救つてくれなければな

「

袁譚は、黙つてそれを聞いていた。

(やうが、それで父上はここから逃れたくておれを呼んだのか……)

(一)

だつたら話は早い。

自分が父上を救つてあげれば、全て解決するのではないか。
袁譚は頬もしい笑みを浮かべて、父に向かつて言つた。

「ならば、この譚が父上をお救いしましょー。
だつて父上は譚をこの世に生み出してくれたのです、父を助けぬ
子がどこにおりましょーや！」

その言葉を聞いたとたん、袁紹は声を上げて笑い出した。

「くつくつく…はははは…」
「な、何がおかしいのですか！？」

袁譚が慌てて言い返すと、袁紹はさもおかしかったと言えた。

「おまえがわしを救う、だと？
何を血迷つておる！

おまえはわしを蔑み、ひどい目にあわせた張本人だらうが…！」

「へ？？」

あつけに取られてこる袁譚に、袁紹は低い声で告げた。

「妾の子は、家を継ぐのもだめなら父母と暮らすこととも許さぬ。
自分が助かるためなら、平氣で見捨てる程度の存在。
妾の腹から生まれたこのわしを、つこむつを見殺しにしたのは誰
だ！！」

それを聞いたとたん、袁譚の顔からさ一つと血の気が引いていつ
た。

ついにやつれ、自分はあれと同じ姿の子供を見殺しにした。

(や、やばい……！)

袁譚は、思わず後ずさつていた。

しかし、そんな袁譚を阻むかのよつこ、背後から何者かが袁譚をはがいじめにしたのだ。

田の前で、血塗られた姿の父が歩み寄る。

「のつ譚、わしは魂が割れてしまつてなあ……。

おまえの知つている表のわしと、この血塗られたわしと今は二人いるのだ。

表のわしは……そつ、おまえの後ろにいる

そのとたん、袁譚を羽交い絞めにしていた手がぐつと袁譚の首をつかんだ。

がくがくと震える袁譚の背後で、低く、怨念に満ちた声がする。

せつかく、育てたのに。

せつかく、死んでからもチャンスを『えてやつたのに』。

「ひつ……ーー！」

袁譚の喉から、ぐぐもつた悲鳴が漏れる。

今自分の後ろにいるのは、自分を育ててくれた方の父上……？

「大丈夫だ、わしらはもう死んでいるから、怪物に引き裂かれても死にはせん。

ただ、表のわしはまだおまえにやられた分の体の再生が追いつ

ていなくてなあ……。
ま、顔を合わせて見るといい

袁譚へ梅鹿の館にて（3）（後書き）

袁譚は、袁紹との会話の中では正しい選択肢を選んだはずでした。にも関わらず、すでにバッジエンジのフラグが濃厚になっています。これは、袁譚がここにくる過程で行動の選択を間違え続けたためです。少年の姿をとつて現れた表の袁紹との会話、怪物に追われて彼を見捨ててしまったこと…具体的に挙げればきりがありません。それ以前に、袁譚は遠い過去にとんでもない過ちを犯しています。それがどのような過ちかは、読み進めていただければ分かるでしょう。

袁謹へ梅辰の館にて（4）（前書き）

苦手な方には先に警告しておきますが、今回からはかなり残酷描
写が入ります。具体的に思い浮かべてしまいやすい方はお気を付け
ください。

袁譚／梅娘の館にて（4）

裏の袁紹はそう言つたが、袁譚には振り向くことなどできなかつた。

父の顔を見るだけでも恐ろしくて、そのうえ自分が何をやらかしたかなど……。

そんな袁譚のあいこを、後ろから回された手がつかんだ。

首をねじ回すような強引さで、袁譚の顔を横に向けていく。

「のう譚、久しぶりだなあ？」

視界に入った袁紹の顔に、袁譚は体中を震わせて絶叫を放つた。

「ひつぎこやああああ……！」

父の顔は、ところどころ肉がえぐれて、骨が露出していた。ほおを食いつきられて、奥歯まで見える歯を怒りに噛み締めている。

る。

間違いなく、あの怪物どもにやられたのだ。

表の袁紹は、尻餅をついた哀れな息子の襟首をつかみ上げて言った。

「い、痛かつたぞ……譚……。
あれは痛かつた！」

袁紹の目から、真紅の涙が流れた。

怪物どもに、いいように弄り殺された。

無慈悲に去つていぐ、息子の後姿を見ながら。

「……分かるか、譚よ？

自分の子に捨てられる親の気持ちが—

自分の子に蔑まれる、妾の腹から生まれた親の心が—！」

袁譚は、何も言えなかつた。

体中が馬鹿になつたみたいに震えて、言葉が出なかつた。

(「、こんな……はずじゃ……ー）

これは大失敗だ。

今までつまくいくと思つていてその通りにならなかつた事は多い
が、それでこゝまで怖い目に遭つたのは初めてだ。

何より、袁譚は今まで、その感情をつまく隠して生きてきたは
ずだ。

それを最後の最後で、死んでから暴かれてしまつなんて。

表の袁紹の手が、袁譚のほおを滑る。

「譚よ、おまえがわしをどう思つていたかはよく分かつた。

痛いほど分かつた。

だから、今度はわしからおまえに痛みを返す番だな

「な

袁譚の背後で、ひたひたと忍び寄る足音がする。
裏の袁紹が、歩み寄ってきたのだ。

(こ、嫌だ、やひつてこんな………)

袁譚は頭の中で叫んだ。

父が自分をやつする気かは、容易に想像がつく。

わいつと、わいつきの父上みたいに、怪物どもにびくちやぐくちやこにいたぶられるんだ。

もししくは、父上皿身が皿分に手を下す……?

(ぞ、ぞうしてこんな田に遭わなくちゃいけないんだー。

おれは名門袁家の当主だぞ? ちやんとそれに見合ひ生き方をしてきたはずなんだ。

そのおれを、こんな田に…… こんな妾腹の野郎のせいだ……)

「ふわけんなあ……」

父の手を振り払ったのは、一瞬のことだった。

田の前で、表の袁紹が体勢を崩して倒れる。

案の定、体が再生しきつていられないせいで本来の力が出ないようだ。

行きがけの駄賃にその手を踏みつけながら、袁譚は脱兎の如く部屋を飛び出す。

捕まつてたまるものか、それだけが袁譚の心を占めていた。

(だつて、父上におれを傷つける権利なんかあるものか!

おれは半分平民の父上より高貴な血が濃いんだ…… おれは生まれながらに父上より偉いんだよー)

初めてそう思つたのは、いつの事だつただろうか。

も、思い出せないへりい前だし、思い出せないへりこのなりゆきだったような気もある。

夜、実家の庭で、年下のあの子に向かって……。

袁譚の脳裏に、おぼろげな記憶が蘇った。

だが、今の袁譚にはどうでもいいことだ。

今はとにかく、あの化け物から逃げることだ。

袁譚が出て行つた部屋で、表の袁紹は床に倒れたままぽろぽろと涙をこぼしていた。

自分はあんなひどい息子に期待をかけていたのか。

あまりの悔しさに涙が止まらない。

「だから言つただろ？、あやつはせん自分の事しか考えておりぬと」

裏の袁紹が、顔をのぞきこんで告げる。

「おまえはそれを知つていながら、それでも希望を捨てられなかつた。

だが、それも今日で終わりだ。

あやつはわしが処分するから、おまえはここで休んでいればよい！」

その残酷な言葉に、表の袁紹は黙つてうなずいた。

「これは、自分の本音だ。

いくら表で取り繕つても、隠しきれない自分の意志だ。

今はそれがはつきりと分かっている。

袁紹の内に積み重なった恨みは、親子の情よりも深かった。

「譚よ……」

走り去つた裏の自分に聞こえなごとに、表の袁紹は息子の名を呼んでいた。

袁譚へ悔恨の館にて（4）（後書き）

袁譚は己の罪を責める父親を拒絶し、一人逃げ出す道を選んでしまいました。しかし袁譚が抗えれば抗うほど、袁紹の怒りは増していきます。袁譚が抜けられない底なし沼にはまってしまっていることは、読者の皆様の目にはもう明らかでしょう。

そのうえ袁譚は未だに、自分が父親に対して何をしているのかが分かっていません。そのため、今回袁紹は袁譚にそれを教えるために、悪夢を振るうことになるのでした。

袁譚×梅娘の館にて（5）（前書き）

スーパー悪夢タイム！！！

時を超えた手紙や他人の記憶の追体験はサイレントヒルでもよく使われている手法です。今回は残酷＆恐怖描写が当社比150%で、袁紹の過去の悪夢が暴きだされます。

追いつめられる袁譚の恐怖をじっくり味わってください。

袁譚へ梅娘の館にて（5）

血塗られた廊下を、袁譚は必死で走っていた。足を踏み出すたびに、床を覆つ血と膿が何ともいえない感触でねばりつく。

「はあ、はあ、はあ！」

前方から、背後の扉から、横道から、次々と怪物が襲い掛かってくる。

なりふり構わずに必死で切り払って、傷つきながらも走り続ける。

だが、それも無駄な抵抗にすぎなかつた。自分が父を拒絶し、蔑んだ時点で、もう運命は決まっているのだ。

「譚（だに）にいるのだ？」

後ろから、父の声が響いてきた。

「おまえはわしに会いたかったのだろう？
たっぷり相手をしてやるぞ。

さあ、親子で一騎打ちだ！…」

その声には、喜びすらにじんでいた。

父は、自分を追い詰めることを心底楽しんでいるのだ。

床がぎしがしきしみ、足音が迫つてくる。

袁譚は大慌てで横道に入つて姿をくらまし、匕口か父をまひつとした。

そして、怪物がいないのを確認して廁に隠れたとたん、世界が歪んで幻を見た。

後ろから、誰かが自分の頭をつかんでいる。

汚物にまみれた廁の穴が、目の前にある。

鼻をつく悪臭が胃の中まで入り込んで、吐き氣を催していく。

「おい、手を放すんじゃないぞ！」

背後で、誰かが言った。

「袁家の恥とはいえ、一応長男だからな。
本当に糞尿に落としたりしたら、袁逢様にどんな仕置きをされるのか」

「でもよ、奥様はこいつを痛めつけたくてたまらないんだり?
だからって、何でおれたちがこんな臭い所に一緒にいてやらなきゃいけねえんだ。

……このガキさえいなければなあ！」

別の男の声が聞こえ、頭に爪が食い込む。

彼はただ、強烈な悪臭と吐き氣をこらえながら、屁唇にまみれた時間を過ごすしかなかつた。

その恐怖と苦痛が、現実のもののように袁譚を貫く。

体をかがめて嗚咽しながら、袁譚は悟つた。

これは父の記憶なのだ、と。

気がつけば、田の前に何かがうしめいていた。
よく見れば、先程臭い体液を撒き散らしていたのと同じ怪物ではないか。

(「こいつ……もしかしてここで生まれたのか?」)

太いミミズのような姿でのたうつそれは、田も鼻も無残に縫い付けられて塞がれていた。

もしかしたら、こいつらは父上の苦痛が生み出したもの?

袁譚がそれを考えたとたんに、扉のすぐ近くで父の声がした。

「どうした譚、一騎打ちが怖いのか?

仕方がないだろ?、こここの怪物は全てわしの一部なのだから。

それも含めて一騎打ちだ!」

袁譚は震え上がった。

父が、すぐそばにいるのだ。

廁には、扉が一つしかない。

気付かれて先手を打たれたら、逃げ場がない。

袁譚は悲鳴をあげたいのを必死でこらえて、父の足音が遠ざかるのを待つた。

どのくらい時間が経つだろ?、袁譚は耳を澄まして遠ざかっていく足音を聞いていた。

田の前の怪物は、さつきからじりじりと近寄りてきていた。

本当はもう少し父上が遠くに行ってくれるとありがたいんだけど

……。

(潮時か。

たぶん今なら大丈夫なはず……！)

袁譚は一息ついて、勢いよく扉を開けて廁を飛び出した。
とたんに、周りをうろついていた犬の怪物が一斉に飛び掛ってきた。

「し、しまった……！」

それでも走りぬけようとする袁譚の体を、悪意に満ちた鋭い爪と
牙がかすめる。

その瞬間、袁譚はまた幻を見た。

頭から、肉料理の食べかすをかぶっていた。

後ろから、その臭いをかぎつけた犬たちが追いかけてくる。
まだ子供であった袁紹の、己の体より大きくて怖い犬たちが。

それでも大人から見れば小さめの犬なのは、袁紹が間違つても命
を落とさないようとの配慮なのだろう。

あの気くわいなおばさん……袁術おじさんの母上がやつたんだ。

そう考えると、確かに父上はかわいそうなのかもしれない。

(あんな目に遭わされたなら、名門を憎んでもじょづがないのかも

……)

何とか幻覚を振り切つて、袁譚はかすかにそう思つた。

これほど無神経な袁譚にもそつ思わせるほど、この記憶にこじめら
れた恐怖は大きかった。

それからも、袁譚は家のあちこちで袁紹の忌まわしい記憶を味わつた。

命令ですから我慢してへださいねと、袁紹を囲んで痛めつける召使たち。

父袁逢がいない夜の孤独と恐怖。

先の見えない霧につつまれたような毎日。

袁譚はそのたびに怪物に傷つけられながら、それでも自分を信じて逃げ回った。

自分は何も悪いことをしていない。

だって、父上を傷つけたのは袁術おじさんとその母上じゃないか。

だったら自分が罰を受ける理由なんて、これっぽっちもないはずだ。

袁譚へ梅根の館にて（5）（後書き）

今回紹介された袁紹の悪夢で、それぞれのクリーチャーがどのような意味をもつているか分かつていただけたと思います。全ては名家のしがらみによつて袁紹が体験した地獄の日々に通じています。そんな父の思い出を追体験させられながらも、まだ自分の潔白を信じ続ける袁譚…次回は、袁譚の運命を決めた最初にして最大の過ちが語られます。

袁譚へ悔意の館にて（6）（前書き）

ここまで読み進めていたいた臣様には、袁紹と袁譚のすれ違いがはつきりと分かつてきていることでしょう。袁紹は袁譚が生前から自分を蔑んだことを根にもつていて激しい攻撃をかけますが、袁譚は自分は生前何も悪いことをしていないと思っています。

いじめなどでは、加害者はそれをすぐ忘れてしまっても被害者はずっと覚えているもの。袁譚の最初の過ちが、袁紹の悪夢の中で語られます。

袁譚へ梅鹿の館にて（6）

気がつくと、袁譚の眼前に中庭が広がっていた。
怪物はいなによつだつたので、袁譚は足早にそこを走り抜けようとした。

しかし、その瞬間、またも幻が袁譚を襲つた。

星がきれいな夜だった。
自分は、酔いを醒まそうとふらりと中庭に入つた。
そこで田にしたものか、まぎれもなく少年であつた頃の袁譚の姿
だった。

袁譚は、じちじかに臂を向けて誰かと話していた。
傍りこな、もつ少し年下の少年がいる。

（あれは……ことこの袁譚だ！）

袁譚はその少年に見覚えがあった。

あれは間違いなく、袁術おじさんの息子、袁燿だ。
そして、確かに自分はこんな夜に袁譚と話した記憶がある。

「ふーん、袁譚は自分が袁家を継げると思つてるんだ?」

袁燿はいかにも馬鹿にするような口調で袁譚に言つた。
「ひつとひつけ、父親の袁術にそっくりだ。

「あはは、従兄さまは夢見がちですねえ。」

だいたい、従兄さまには平民の血が混じつてゐるんだから、ボクが

上に決まってるじゃないか！

あなたのお父様だつて、ボクのお父様よりずっと下賤に近いくせ
「」

そうだ、こいつは自分の血筋を徹底的にあざけりやがったんだ。
そして、それにムキになつて対抗した自分、袁譚が口にした言葉
は……。

「ふん、それはあくまで父上の話だろ。
おれはおれで、父上とは違うんだよー。」

今思い出すと、袁譚の背中に冷や汗が流れた。

「いいか袁耀、父上は半分平民だけどな、おれは4分の1平民なん
だ。

確かに父上の血は穢れているかもしねいけど、おれには袁家を
継ぐのに十分な濃さの高貴な血が流れてる。
てめえの父親があれの父親より上だからって、おれまで一緒にす
るなよ！…」

そうだ、この時から、自分は父上を穢むようになったんだ。

傲慢な従弟にばかにされて、それが腹立たしくて……。

その時は成り行きで口にしただけなのに、いつの間にかそれが本
心になつていた。

自分の身に降りかかる不幸を、全部父の生まれのせいにして。

しかし、自分もそれまで口に出さなかつたが、同じじような気持
ちを無意識に抱いていたのかもしれない。

だから袁耀に問われた時、自然とああいう答が出たんだ。

しばらく忘れていたことを思い出しながら、袁譚は自分が犯したとてつもなく大きな間違いに気付きました。

自分は今、父袁紹の記憶を追体験しているのだ。
その中で、自分と袁譚の会話を第三者として聞いているといふことは……。

あの夜は、確かに袁家の皆が集まって宴を開いていたはずだ。
自分はどうせ誰も聞いてないだろ?と思つてあんな事を口にした
が……。

父上が、自分と袁譚の会話をこんなにはっきり覚えているといふことは……。

聞かれていたんだ、父上に。

幻が消えてからも、袁譚はしばらくそこから動けなかつた。

体が鉛のように重くて、足が動かない。

驚愕のあまり息がつまつて、うまく空気が吸えない。

(じゃあ、何だ……父上は、初めからおれの気持ちを知つていて……!?)

袁尚をかわいがつたのも、おれを冀州から追い出したのも、
あの夜から全部父上の中では決まつてたつてことか!?)

思い返してみれば、父袁紹は自分と顔を合わせたくなかつたのか
もしれない。

本心ではあんなことを思つていながら、上つ面だけですり寄つて
くる息子が嫌でたまらなかつたのだろう。

自分がもし同じ立場だつたら、そんな息子は首をはねてしまつ
かもしれない。

袁譚は身勝手にも、そつ思つた。

「ふふら、どうした譚よ？」

懐かしい夢でも見たか？」

後ろから、砂利を踏みしめる足音とともに、父の声が響いた。

「ち、父上……！」

袁譚は飛び上がりそつなくらこ身をすくめた。
振り返るとそこには、血塗られた剣を片手にゅつへつと歩み寄つ
てくれる父がいた。

「ひいい……！」めんたこ……。

あの、や、その……つい出来心で……！」

袁譚は震えの止まらない口で、つまく聞き取るのも難しこよつな
声で謝つた。

それを聞くと、袁紹はふと足を止めた。

だが、袁紹の口から漏れたのは、許しなどではなかつた。

「くわくわく……ふふふあはははは……！」

突然、袁紹は声高らかに笑い出した。

そして、夙餅をついている袁譚を見下ろして嘲つた。

「ああ……おかしい…

おまえ、まさか今思い出したのか？
わしさあの夜からずっと苦しみぬいていたのに、そつか……おまえには忘れるほどちっぽけな事だったか！…！」

さうやら袁譚の中途半端な謝罪は、袁紹の怒りの炎に油を注いだようだ。

いや、この期に及んで謝つても、父が許してくれるとは思えない。

袁譚は、いっそりと地面の砂利を握った。

「ふふふ、息子よ、覚悟！…」

袁紹がすぐ田の前で剣を振り上げた瞬間、

「せりゃあああ…！」

袁譚は渾身の力をこめて、父の顔めがけて砂利を投げたのだ。
幾多の固い小石が、袁紹の顔に襲い掛かる。

「うぐーーー！」

父が思わず顔を覆つて田を伏せた隙に、袁譚は再び脱兎の如く逃げ出した。

どうせ許してもらえないなら、もつ謝る必要はない。

力の限り父に抗い、できれば倒してここから抜けてやる。

そうだ、おれは自分より下賤な父上に地獄に落とされる筋合い

はないんだ。

袁譚へ悔恨の館にて（6）（後書き）

今回、また袁家でマイナーな人物が出てきました。袁燿は袁紹の異母弟である袁術の子で、袁譚のいとこに当たります。父である袁紹と袁術の関係は子世代にも影を落としていたため、袁譚がこのようないたたかげない言葉を浴びせられてしまつた訳です。

しかし、袁譚が父を本当に尊敬して愛していれば、あの場面でもこんなセリフが出ることはなかつたでしょう。これが袁譚の最初にして最大の間違いです。

袁紹へ追憶の実家にて（一）（前書き）

父と「口」の罪を拒絶し、袁譚は逃げまどいます。

そんな袁譚を襲つ最後の悪夢が、祖母の部屋にありました。今回
は袁紹がまだ幼かった頃、袁紹の魂が割れるきつかけになつた悪夢
が語られます。

袁紹／追憶の実家にて（1）

再び暗い廊下を走りながら、袁譚の足はある場所に向かっていた。

館が変貌する前、怪物がいなかつた祖母の部屋だ。

あの部屋は、どうも特別な感じがする。

もしかしたら、あの部屋にここから抜け出すための何かがあるのかもしれない。

いや、何もなくても、怪物がいない部屋でしばらく休めればそれだけでもいい。

今はとにかく、体勢を立て直さなければ。

袁譚は、父が後ろにいない事を確認して、するりと祖母の部屋に滑り込んだ。

そこには、確かに袁紹にとつて重大な何があつた。

うまくいけば、確かにここから出ることもできたかもしない。

ただし、袁譚の手に負えるものかどうかは別として。

部屋に入ったとたん、袁譚はまたもや幻に襲われた

きれいに整つた部屋に、凜とした高貴な女性がたたずんでいた。その女性は、袁譚が知つてゐるよりずっと若い姿をしていた。

間違いない、これは祖母、袁紹の3人目の母親だ。

「さあ紹、今日からおまえは私の子になるのですよ」

突然父上と引き離された袁紹の前で、知らない女の人が言った。

「安心なさい、おまえが私の子になつてくれる以上、あの女のやつ
な乱暴はしません。

だからおまえも、私のことを母として敬うのですよ」

女的人は、微笑みながら袁紹のほおを撫でた。

しかし、袁紹は体を固くしたまま、震えていたことしかできなか
つた。

「ここに来る前、袁紹は2人目の母に、袁術の母に虐げられてい
た。父はそんな袁紹の身を案じて、父の兄袁成の養子に出してくれ
たのだ。

しかし、これまで袁紹は名家の威光をあがめる人々からひどい扱
いを受けてきた。

袁紹の心には、その恐怖が刻み込まれていた。

田の前の新しいお母さんが、自分をいじめない保障がどこにある
というのか。

「ひつ……！」

袁紹の目に、涙が浮かんだ。

それは確かに新しいお母さんに失礼だつたかもしれない。

しかし、袁紹にとつてその反応は『ぐく自然な、傷跡をかばうのと
同じような行動だったのだ。

「まあ、どうしたの？」

お母さんよ

女人は困ったように、袁紹の頭に手を置いた。しかし、袁紹はがたがたと震えたままだ。女人の表情が険しくなってきた。

袁紹は、ただただ恐怖に支配されていた。

これまでの経験からして、こういつ身分の人気がこういつ顔になつたあと、自分の身に起るのは……。

袁紹には、想像するだけで耐えられなかつた。

そして、あらうとか母親になつてくれるその人の前で叫んでしまつたのだ。

「うああああ助けてえーっ！…お母さん…！」

袁紹の目から、堰をきつたように涙があふれた。立つてもいられずに尻餅をついて、両手ではつまづかる。

「う、ごめんなさい……ごめんなさい…！…
いい子にするからぶたないで、お母さんを殺さないで…！…
いや、助けて……もう嫌あーお母さんに合わせてえーっ…！」

袁紹は完全にパニックに陥っていた。

目の前の人気が誰でも鬼に見えるほど、袁紹の心は磨り減つてしまつていたのだ。

そんな袁紹の反応に、新しい母親はぎつと唇を噛んだ。

「この子は、私を母親だと認めてくれない。

「この子が私の子になつてくれなければ、私はどうなるの？」

彼女は、袁紹が自分の子になってくれる」ことが本当に嬉しかった。

だつてそうすれば、自分は袁家当主の妻としてきちんと役割を果たせるのだから。

彼女は、袁成との間に子がなかつた。

袁家の跡継ぎを生むといつ崇高な役割に選ばれておきながら、未だそれを果たせていない。

袁紹が養子に来るといつ話は、そんな彼女にとって天の助けだつた。

（だから私が、袁紹を袁家の跡取りとして立派に育てなければ！）

彼女は、半ば脅迫のよつていつわつ思つていた。

だつて、自分は今まで子がないことで肩身が狭い、申し訳ない思いをしてきた。

あんなぼんくら息子でも、腹に宿した袁術の母がうらやましくて気が狂いそうだった。

袁紹を立派に育て上げれば、自分はやっとそれから解放される

……。

だけど、袁紹は自分を受け入れてくれない。

このままでは私は一生楽になれないかもしれない。

この子さえ言つことを聞いてくれれば……彼女の頭に、血が上つていつた。

袁紹～追憶の実家にて（一）（後書き）

この三人目の母とのシーンは、袁紹の運命を決めるほどの大変な悪夢であるため、書き綴るうちについ長くなってしまいました。次回もこの悪夢の後半、それが終わるといよいよ袁譚のボス戦です。脱出を決意した袁譚はその意思を貫き通すことができるのか、愚かで高慢な息子の結末を見届けてやってください。

袁紹／追憶の実家にて（2）（前書き）

袁紹の記憶はまだ続きます。今回のキーパーソンとなっている袁紹の三人目のお母さん、彼女もまた心に悪夢を抱えた人間でした。今でも結婚して子供ができるないと両家の親から重圧がかかるというのに、子供を残すことが最高の孝行とされる儒教の国で、しかも名門の血統を託されて結婚した彼女が、子がないことでどれだけ精神的に追い詰められていたかは想像に難くありません。

そんな彼女の妄執が袁紹を追い詰め、悪夢は連鎖していくのです。

袁紹／追憶の実家にて（2）

「お静かになれ……」

気がついたら、彼女は目の前の子供に手を挙げていた。
ほぼ無意識にその手は振り下ろされ、ぱーんと乾いた音が響く。

「こやあああ……」

袁紹はじんじん痛むほおをかばうように、体を丸めた。
そこで初めて、彼女は自分が子供を殴ったことを認識できた。

（あ、あら……？）

彼女は一瞬、自分が何をしたか理解できなかつた。
自分は子供を殴つた、袁紹はそれを怖がつて泣いている。
これでは、まるで……。

あのこやうじこ袁術の母と同じじゃないか。

（ち、違う、これは違うのよ……！
私は、あんなひどい事をしないわ！）

彼女は、自分を説得するよつと言い放つた。

「そう、これは羨なのよ！

あなたが将来袁家の当主になつて、輝かしい人生を送るためのー！」

彼女はそう言いながらも、袁紹に手を挙げては振り下ろしていた。

だつて、妾の子として産まれて一生を送るよりは、袁家の当主として生きたほうが幸せでしょ？

あなたのために言つているのよ。

これはあなたを幸せにするための、愛の鞭なのよ。

そう自分に言い聞かせながら、彼女は袁紹に暴力を振るつた。

しかし、袁紹にとつてその行為は袁術の母と同じだといつては変わりはない。

養子に出しても一向に良くならない袁紹の様子から、袁逢はついにそれを察知するに至る。

そこで彼女が袁逢に出した弁明の手紙が、先程袁譚が読んだものだ。

く私もできることなら、あの子を傷つけたくはありません。

でも、あの子はあの娼婦を思つて泣き叫ぶ限り、袁家の当主にはなりえませんわ。

私はあの子のために、心を鬼にしていっているの

変化は、袁紹の方にもあつた。

疲れ果てた袁紹に、彼女はこう言つたのだ。

「私を母だと思いなさい。そうしたら、私はもう殴らないから。

1日耐えれば次の1日、3日耐えれば次の3日は優しいお母さんでいてあげるから。

あなただつて、毎日痛いのは嫌でしょ？

」

始めは袁紹も、信じていなかった。

しかしある日、もうどうでもいいと思つて彼女をお母さんと呼んだら、本当に殴られずに撫でてもうれた。

(ああ、こいつすれば痛い目に遭わずに済むんだー。)

それに気づいた袁紹の行動が変わるのは早かつた。

袁紹はそれから毎日のように彼女を母上と慕い、孝行するようにこいつそり涙を流した。

しかし、本当の母のことを見れることはできなかつた。

袁紹は毎日のように、夜になると本当のお母さんに会つたいとこいつそり涙を流した。

それが彼女に見つかるのに、それほど時間はかからなかつた。

ある夜、袁紹がまた実の母を思つて泣いていると、側に彼女が来て言つた。

「あのねえ、お母さんほんとうにこるんだから、もう泣くのはやめなさい。

あなたを産んだのは誰でもない、私になつたの。
あなたの母はただ一人、私なのよ。」

袁紹は泣き止んで顔を上げたが、彼女に向けられた視線は明らかに不信感をにじませていた。

それがまた、彼女のプライドを傷つける。

「この子だけは誰にも渡さない。

この子は私以外の誰の子でもない……。

それに、嫉妬もあった。

袁達に気に入られた娼婦はこつして袁紹を産んだのに、どうして袁家当主の妻である自分は子供に恵まれなかつたのか。そんなどうどいた感情が、彼女に残酷な言葉を吐かせた。

「あなた……もしかして、またあの地獄の日々に戻りたいの？
私だけをお母さんとして、ちゃんと袁家の嫡子として務めてくれ
れば、あなたはもう地獄に落ちなくてすむのに……」

彼女は袁紹に、実母を捨てればあなたは救われると説いたのだ。

これまで散々地獄を味わつてきた袁紹に、選択の余地はなかつた。
だが、それは同時に袁紹自身の心をも裏切る行為だつた。

実の母を忘れるなんてそんな事はできない。

しかし、このままでは自分が生きていけそうにない。

迷つた末、袁紹は実の母を慕つ心を悪夢とともに切り離した。

そうして、袁紹の魂は表と裏の二つに分かれた。

現世で生きるために、冥府への道を閉ざすことになつた。

袁譚は、息も絶え絶えでその苦痛を味わつていた。

知らなかつた、父がこんな体験をしていたなんて。

袁紹の気持ちは袁譚には理解できないが、無理矢理体に押し込ま
れる苦痛だけは十一分に理解できた。

袁紹／追憶の実家にて（2）（後書き）

袁紹の悪夢の追体験は、ひとまずここで終わりです。

次はいよいよ袁譚のボス戦ですが…招かれた場所が前章と異なつていているため、ボス敵も同じではありません。

しかし、勘の良い読者の皆様の中には、すでにボス敵が誰なのか分かつている方もいるかもしれません。

袁譚へ梅娘の館にて（一）（前書き）

記憶の再生がとぎれて、ついにボス戦です。

これまで自分が名家の嫡子であることに驕り、高貴な血筋だから持ち上げられて当たり前と思つて生きてきた袁譚に、高貴な血筋だからこそその悪夢に縛られた女の妄執が襲いかかります。

果たして袁譚は、無事に勝利し脱出することができるのをどうか。

袁譚と悔恨の館にて（二）

「かわいい、私の子……」

ようやく幻覚から開放された袁譚の耳に、祖母の若い声が響いた。

田の前に、艶やかな着物のすそが見える。

「祖母上……？」

信じられないながらも顔を上げた袁譚は、一瞬で凍りついた。
田の前で袁譚を見下ろしていたのは、明らかに人間ではありえない姿をしていた。

彼女の、首から下は人間の形をしていた。
しかし、首から上はこの世の生物とは思えない禍々しさを放つ
ていた。

彼女の顔には、真っ白でつるつるのペラリとした髪があった。

そこに、真っ赤な紅をさした、妙に上品な口だけが存在している。

そして頭から伸びる長い黒髪は、その一束一束が蛇のようにうねり、それぞれの先端は手になっていた。

「かわいい、ワタシの子……」

袁譚を抱きしめようとすると、頭から伸びた無数の手が鉤爪のついた指を広げた。

その瞬間、袁譚は無様に尻餅をついて叫んだ。

「「わわやあああ——！」」

袁譚は恐怖にすくんだ体を何とかばたばたと動かして、後ずさり始めた。

それを見たとたん、怪物の口元が怒ったように歪む。

「お静か二ナサレ——！」

怪物の叫びとともに、無数の手が袁譚の体をつかんだ。力が抜けて足腰立たない袁譚を、無理矢理立たせるよつて引っ張り上げる。

「そり、ワタシの言つておりにすればいいのかわいこワタシの子——！」

鋭い鉤爪が袁譚の体にござりござりと食い込む。

(やうが、こいつは……父上の中の祖母上なんだ！
きっと父上には、祖母上がこんな風に見えていたんだ……)

袁譚は苦しい息の下でそれを悟つたが、もはやどうすることもできなかつた。

怪物は袁譚の足や腕をつかみ、恐怖で硬直しているそれを強引に動かそうとする。

「ぐつふつ……ひ、ぎここい——！」

袁譚が悲鳴を上げると、怪物は優しくたおやかな手つきで袁譚の顔を撫でた。

母が子のほおを撫でる、丁寧なしぐれ。

泣く子をあやそりとでもしているのだろうか。

たとえそれが子にとって恐怖しか生まなくとも、彼女の心に迷いはないのだ。

「は、放せこの化け物！
放せっつってんだよ……！」

袁譚はどうにか剣を握った手の手首だけを動かし、怪物の髪から伸びる手に斬り付けた。

その手は予想に反して、豆腐のよじて柔らかく、すんなりと切れた。

「ああアア……！」

怪物がか細い悲鳴を上げる。

袁譚はその声に少しだけ罪悪感を覚えたが、それはやらない悪夢の始まりに過ぎなかつた。

怪物は痛みに身を悶えながら、それでも凜とした口元を袁譚に向けた。

「諦めません……いかに拒まれヨウと、ワタシは……！

ワタシは、袁家の母……！

おまえは何がナンデモ、ワタシの子になるのデス……！」

怪物の叫びとともに、切つたばかりの傷口がぼこつと盛り上がり

た。

むらむらとうねる髪の束が伸びて、切り口からメキメキと新しい手が生えてくる。

それは、執念だ。

子を孕めなかつた彼女の、袁紹にかける執念の手なのだ。

さすがの袁譚もこれには驚いた。

「う、うわ、放せ放せよおお……」

暴れる袁譚に腹を立てたのか、怪物が普通に肩から生えた手を袁譚に向かつて突き出す。

上品な着物の袖から、透けるように白い肌がのぞいた。と、突然その肌が不自然な形に盛り上がった。

「コレはワタシの役目……ワタシを縛る鎖……今度はアナタが、ワタシの身代わりになつて頂戴！」

白い肌を破つて血糊とともに現れたのは、太い鎖だった。先に重たそうな分銅までぶら下がっている。

そう、彼女自身も、名家の役割に囚われた身なのだ。

だから今度はその鎖を子供に押し付けて、自分は楽にならうといつのだ。

痛々しく自身の血に濡れた何本もの鎖を、怪物は袁譚めがけて振りかぶつた。

重い金属音とともに、冷徹な分銅が袁譚に迫る。

すでに他の怪物どもに散々傷つけられ、満身創痍の袁譚には、ひ

とたまりもなかつた。

じす黒い鉄の塊が、無慈悲に打ち込まれる。

時折袁譚の体から響く鈍い音は、骨が折れる音なのだろう。

「ひゅっ……ぐぎこ……ー」

断末魔の悲鳴すら無残にじきれさせられ、袁譚の意識は奈落の底に落ちていった。

ただ怪物の叱咤する声だけが、袁譚の耳に残っていた。

誰かがおれを引きずっている……。

袁譚の意識がかすかに浮上した時、袁譚は襟首を何者かにつかまれて引きずられていた。

もちろん袁譚を助けるつもりなどない。

墓から掘り出した死体を無理矢理連れ歩くような、強引な手だ。

「譚よ……」

その手の先から、父の声がした。

だが、抵抗するのもおつくなほど、袁譚は疲れ果てていた。体中がバラバラになつたように痛くて、指一本動かせなかつた。

袁譚へ梅娘の館にて（一）（後書き）

哀れ、袁譚は祖母の幻影に勝てず、逆に倒されてしまいました。
しかし、死人は死なないため、負けてもここで終わりにはなりません。

袁紹は動けなくなつた息子を引きずつて、どこに連れて行くのでしょうか。次回、表と裏、一人の袁紹の袁譚への思いが語られます。

袁譚／金綱の部屋にて（前書き）

重傷を負つて行動不能になつた袁譚を、袁紹は引きずつてこませ
す。

すぐ地獄落としにしないのは、父親としてまだ言いたいことが残
つてゐるからです。

今回さきつの二二〇人が見つけられたので、いつもよつ若
干長いです。

袁譚／金網の部屋にて

次に袁譚が目覚めたのは、妙に熱氣のこもった場所だった。仰向けに横たわる袁譚のほおを、下から吹き上げる熱い風がなでていく。

「……？」

袁譚はかすれた声でつぶやいた。
「……」
じつにか動く指で床をなぞると、じつやう固い網のようになつて
いると分かった。

熱風は、その網の間から吹き出していた。

妙に生臭い熱風……。

それは汗ばむよつに熱いのに、じつか背筋が凍るよつた寒気を
引き起こした。

「譚よ……」

すぐそばで、父の声がした。

慌てて振り向くと、血塗られた方の父がそこにいた。

起き上がる」ともできず震える袁譚のほおを、父の冷たい指が
なぞる。

袁紹は物憂げな表情で袁譚を撫でながら、独り言のよつた言葉を
紡いだ。

「実際に短い間だったな、こちらのわしがおまえといつして話すのも。

まあ、それももう終わりだ……。

おまえはおまえの心にふさわしい、卑しい場所に落ちて頭を冷やすとよ」

袁紹は、わび付いた床の金網をゆっくりと指でなぞった。

「この下に何があるか分かるか？

やこがおまえにふさわしい場所、そつ、地獄だ」

「地獄……？」

ぼんやりとしたまま聞き返す袁譚に、袁紹はうつろな表情のまま答える。

「そつ、地獄だ……罪を犯した者を苦しめ、罰するための場所だ。わしはおまえのせいで、生きながら地獄を味わった。そこまでのことをしておまえを、のつのつと安らかな冥界に行かせると思つたか？」

袁紹の声に呼应するように、地の底からひときわ強い熱風が吹き上げた。

その風がほおを撫でるたび、袁譚は刺す様な痛みを覚えた。

体中が痛いのにそれでも際立つて感じられるほど、その感触は苦痛だった。

袁紹はぐつたりとした袁譚の指先を、そつと持ち上げてもあそんだ。

「ああ、全くもって虚しいものだ。

わしの精をもって生まれた子が、わしはこりぬと申つだから……。

子を成すところじが、これほど虚じて結果になるとは思わなかつたぞ」

袁紹は闇よりも暗に田で袁譚の顔をのぞきみ、告げた。

「のう譚よ、わしがこりぬところじせ、どうこう意味か分かるか？」

わしの存在から生まれたおまえ自身の魂もこりぬ……やうこう事だうつへ。」

「……」

ぼんやりしていた袁譚の田が、急に見開かれた。

袁譚にとつて、その事実は初耳に近かつた。

今までも聞いたことはあつたけれど、これほど実感を伴つて耳に響いたのは初めてだった。

「ちょ、待つて父上……おれはそんな意味で……！」

かすれた声で慌てて言つ返す袁譚を遮つて、裏の袁紹は無慈悲に続ける。

「もうよこ、おまえの偽つはもつたくせんだー。

その身がいらぬところなれば、望みどおり地獄に捨ててやる。要らぬ者にふさわしく、地獄で悪魔に食われているとよー」

そう言って、裏の袁紹はわざと手を振り下ろした。

袁譚の背中が、ふいに支えを失つた。

「え……？」

金網が外れたことに気がついた時、袁譚の体はすでに落下を始めていた。

動かない体が、すうっと下に沈んでいく。

目の前で、裏の袁紹がかすかに笑つた。

唇が、さよなら、と動いた。

その瞬間、袁譚はようやく己の運命を確信した。

自分は父に逆らつたせいで、地獄に落とされるのだ、と。

しかし、落ちていく袁譚の体をつなぎとめるものがあつた。何者かの手が、袁譚の手首をつかんで引き止める。

すがるような思いでその手の主を見上げて、袁譚は驚愕に目を見開いた。

それは、袁紹だつた。

血塗られていない、表の袁紹だ。

ずっと自分で育ててくれた、優しい父なる袁紹だ。

「あ、お父上……！」

「愛しい譚よ……！」

一人の声が、重なつた。

「譚、おまえという奴は……なぜ、こんなになるまで気付かなんだのだ……！」

表の袁紹の目から、ぽろぽろと大粒の涙がこぼれた。
冷たい死者の涙が、袁譚のほおに降りかかる。

「いや、おまえに何も言えなかつたわしにも落ち度はある。
しかし、わしはおまえと……こんな終わりを迎えたくなかった
！」

我が血を継ぐ子を成しておいて、この手で地獄に落とす方の身にもなつてみよ……」

袁紹の嗚咽とともに、手の震えが袁譚に伝わっていく。

袁譚は、あっけにとられて何も言えなかつた。

父が、自分のために泣いている。
自分と別れるのが悲しくて、泣いている。
あんなにひどい事をした自分を、まだ泣くほど愛してくれている。

「父上……なぜ……？」

そう問うだけで精一杯だった。
ここまでもれても愛してくれる父の心は、袁譚には想像もつかなかつた。

袁紹はそんな袁譚に、優しく微笑んで答えた。

「子は親を無条件で愛するとは限らぬ……だが、その逆せざりうるうな。

わしだって、おまえを初めて腕に抱いた瞬間は最高に幸せである。

つた

その答えに、袁譚の眼からどつと涙があふれた。

今まで数十年生きてきて、気付かなかつたぬくもりがそこにあつた。

袁紹は親として、袁譚を無条件に愛してくれていたのだ。

問題は、袁譚が名家の誇りにからめてそれを感じようとしたことだ。

ゆえに、今袁譚は地獄への穴にぶら下がつてゐる。

「愛しい譚よ……」なんにも愛して育ってきた我が子。だが、わしにまつむおまえを助けてやれぬ！」

袁紹はさすがと袁譚の手を握り締めた。

「おまえは愛しい我が子……だが、おまえへの恨みはせいや愛情などで抑えられるものではない！

愛しい……が、許せぬ！ 裏は生前からおまえを許すなどなかつた！

そのおまえがすぐれば媚を売るのが辛くて、不快で、苦しくて

……」

だからせめて、生きている間に手にかけないよ」と、

青州に出して、お互にのために遠ざけていた。

「のう譚よ、おまえはこれから地獄に落ちる、これはもう決めたことだから止められぬ。

しかし、最後に賭けをしようではないか

「賭け？」

袁譚は思わず首をかしげた。

これから地獄に落とされるのにて、この上何を賭けるところのだらう。

袁紹はかすかに震える声で、袁譚に告げた。

「わしはこれからも、人に助けを求めて魂を直す手伝いを求めていく。

だが、もしおまえが言つようて、わしが卑しく劣つた人間で……救われる価値のない人間ならば、いずれわしも救われずに地獄に落ちることとなる」

袁紹はしうぼりだすようなかすれた声で、言葉を続ける。

「もしも、おまえの考えが正しくてわしが地獄に落ちる」とになつたら……その時は必ずおまえを見つけ出して、ずっと側にいてかわいがつてやる。

同じ釜で煮られ、同じ串に刺されて、絶え間ない責め苦の中ですつとおまえを愛してやる……」

袁譚のほおの上で、袁紹の涙と袁譚の涙が混じり合つ。

袁紹の手をかすかに握り返して、袁譚は心から父に感謝した。

父の心にあるのは、憎しみだけではなかつた。

こんなに深い憎しみの底で、まだ自分を愛せる人間がいる」とが袁譚には信じられなかつた。

袁譚～金綱の部屋にて（後書き）

高慢で家の名誉において高ぶつた袁譚を、妾腹の子としての袁紹は許せず、しかし父親としての袁紹は一生懸命愛そうとしました。袁譚に対するこの感情のもつれには、袁紹の割れてしまつた魂が非常に具体的に表れています。

今回、袁譚編の最終話で、袁紹は袁譚に一つの提案をしました。これから物語に続いていく重要な内容を含んだ最終話、どうぞお見逃しなく。

袁紹～金綱の部屋にて（前書き）

袁譚編もついに最終話です。

袁譚は袁紹の一族ということでの氣合が入つてしまい、前章よりだいぶ長くなってしましました。しかし前章は単なる導入だったので、本編であるこの章からはじめての長文でいいのかもしません。

父の悪夢に囚われて袁譚は最期に何を思ひのか、親子の愛が滲み出す最終話です。

袁紹／金網の部屋にて

袁譚の手が、力を失いずるかと滑っていく。

もう、別れの時も終わりだ。

袁紹は最後に息子の顔を田に焼き付けるよひに、袁譚の顔を真つ直ぐ見つめて言つた。

「最後にこれだけは言つておく。

短い間であつたが、わしに希望をくれてありがとう」

それは、感謝の言葉だった。

「おまえは、終わりのない暗闇にいたわしに、最初に光を見せてくれた。

たとえその後さらなる闇に放り込まれようと、あの十数年、おまえがわしの希望であつたことは確かなのだ。

おまえのおかげで、わしは人生の何分の一かを希望と共に過いせた。あの幸せな時間は、何物にも代えられぬ！」

袁譚と袁紹の手が、徐々にほどけていく。

最後に名残惜しむように互いの指先を確かめあつて、袁譚は地獄への暗い道に沈んでいった。

「さらばだ、譚！

また会おう……」

すゞい速さで遠ざかる父が、涙ながらに叫んだ。

袁譚はもう豆粒のよになつた父に向かつて、しつかりとうなづいた。

「こんな優しい父を、何で自分はあんなに蔑んでいたんだ？」

袁譚は落ちながら思つた。

その理由は、今の袁譚には分かつていた。

自分も祖母と同じように、名族という形だけの価値に囚われていたんだ。

それに構つあまり、かけがえのない親子の愛すらも見えなくなつていたんだ。

分かれば分かるほど、自分の愚かしさに反吐が出そうだ。

そんな自分を最後まで愛してくれた父が、神様のように思えた。

（次に生まれ変わる時は、また父上の子供がいいな……）

袁譚は短い人生を思い返して、そう思つた。

（今度こそ、父上に一杯孝行して、親子で幸せになるんだ。父上がどんな生まれでも、父上だから大好きって言つんだ。それで、父上にたくさん撫でてもらうんだ……）

地獄でまた会いたい、とは思わなかつた。

だつてそれは、あんなに愛しくて優しい父上が、地獄に落ちるつてことなんだから。

いつの間にか、自分が落ちてきた穴は針の穴のように小さくなつていた。

それを見上げたまま、袁譚は蚊の鳴くよくな声で最期の言葉を紡いだ。

おとうさんごめんなさい

袁譚の心には、これまで一度も味わったことのない、心の底からの後悔があふれていた。

死んでから一生で初めてといつのはおかしいけれど、本当に初めての謝罪と後悔だった。

願わくば、父が地獄で自分を探しに来ませんように。

願わくば、父が誰かに救われて安らぎを得られますように。

そして願わくば、地獄で罪を償つた後に、再び父と会えますよ。

う。

初めて知つた清らかな祈りを胸に、袁譚は底知れぬ深淵に飲み込まれていつた。

「うへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ................................................................

袁紹の嗚咽が暗い部屋に響く。

袁譚の姿が見えなくなつても、表の袁紹はしばらく六から離れられなかつた。

そんな表を尻目に、裏の袁紹はもう次のことを考えていた。

「さて、あれは役に立たなかつたが、わしは少し気が晴れたぞ！
しかし死人は皆考へが凝り固まつてあるのかもしれぬな。

今度はいつそのこと、生きた人間を引き込んでみるか……」

裏の袁紹はまだ泣き止まない表を横目でちらりと見てゐたやう。

「どうだ、譚がだめなら熙と尚にでも会つてみるか？
あやつらもむづく、袁家を再興する事などできまい！」

「それはならぬ……」

悲鳴のような叫び声で、表の袁紹は即答した。

袁家を再興する事はできないから……裏の袁紹が言わんとする」とはすぐに分かった。

確かに、袁譚と違つて次男の袁熙と三男の袁尚は明確に父を蔑んだことはなかつた。

しかし、本心までそつかといつと保障はないにもない訳で……。

「嫌だ、もうこれ以上我が子を手にかけさせてくれるな……！」

あの子らには触れず、命運のままにさせてやりたい。

あの子らは私に絶望を与えなかつた、ならばむづくも知らぬままでいてよいだらう……？」

表の袁紹の必死の訴えに、裏の袁紹は不服ながらもうなずいた。

「分かつた、ではあの二人に手は出さぬ。

だが、その代わり生きた人間を引き込むのは試させてもうづくぞ」

その提案には、表の袁紹も素直にうなずいた。

正直死者が生きた人間を巻き込むのは悪い氣もするが、袁紹もあまりぐずぐずしてはいられないのだ。

袁譚に別れ際に語つた言葉……自分も救われなければ、やがて地獄に落ちる。

他人の靈を巻き込んで勝手に地獄に落とし続けて、そんな事を

いつまでも続けられる訳がない。

いずれ罪に染まつた魂は、地獄からの迎えにあずかることになるだろ'づ。

そうならぬいためには、多少手荒な方法でも早く救つてくれる人を探すしかない。

袁紹としても、その辺りはもつ手段を選んでいる余裕がなかつた。

「よし分かつた、生きている人間だな。
では、我らの故郷、南へ！」

あえて一人の息子から離れるように、袁紹の魂は南へと浮遊して
いった。

後には、地面を黒く穿つ涙の跡だけが残つていた。

袁紹／金網の部屋にて（後書き）

ここまでで、書き溜めた部分は終わりです。そのため、ここから
は更新頻度ががくんと遅くなります。

次の章からは、メジャーな人物を招いて物語を開いていきます
ので、どうぞご期待ください。

劉備／汝南の街道にて（前書き）

袁紹の悪夢は救われないまま、新章に突入です。

今回招かれるのは、三国志において主役を張る人物、仁徳の人劉備玄徳です。この人物は有名なので知つていらしやる方が多いと思いますが、一応紹介を置いていきます。

劉備　りゅうび
・玄徳　ゲントク
生年161年 没年223年

漢王朝の復興を目指し、後に蜀漢の皇帝となつた人物。
飛　ウヒ
という二人の豪傑と義兄弟の契りを結んでいる。かつて袁紹と敵
対する公孫？に仕えていたことがあるが、官渡の戦い辺りでは袁紹
に身を寄せていた。袁紹の弟である袁術を討伐しており、さらに義
弟の關羽が袁紹軍の武将を一人討ち取つてゐるなど、袁家の運命に
意外と多くからんでいる。

劉備／汝南の街道にて

救世主、それは文字通り世を救い、天下万民を救うものだ。

彼は誰にでも手を差し伸べてくれる。

彼はどんな貧しい、身分の低い人間にも希望を与えてくれる。

彼は凶悪を打ち倒し、自分たち大衆を楽にしてくれる。

「言つ」ことは夢物語でも、現実に救世主と呼ばれるのはたいていの場合人間である。

そしてその救世主は、だいたい民衆の好みに合つてゐるからそう呼ばれるのだ。

もし救世主にお願いしたら、私も救つてもらえるだらうか？
私が立場上、民衆が目の敵と憎んでいる人間の同族でも？

「あぢやー……じりや取り返せそうにないな

茂みに伏せて様子を伺いながら、張飛は小声でぼやいた。
視線の先には、古城が横たわっている。

その城壁には、「曹」の旗が所狭しと並んでいた。

「つむ、確かにこれではもう手を出せぬ。

「」には見つからぬつちにて、早々に引き上げましょう兄者ー。

隣にいた关羽も、難しい顔でつぶやく。

第二人の意見を耳に、劉備は残念そうにため息をついた。

(自分の城を持つのは、難しいことだな……)

田の前の古城は、数年前は劉備たちが拠点にしていたのだ。ここを足場に、袁紹との全面対決に向かう曹操の背後を突いていたが、つまいかなかつた。

結局劉備たちはいつものごとく敗走し、今は親族の劉表に身を寄せている。

「分かつた、ここはあきらめて荊州に帰ろう。

竜が淵に潜むは天に昇らんがため……いつかまた、天の時がくる」
もはや言いなれたセリフをさらりと口にじて、劉備は古城に背を向けた。

劉備たちは駒を並べて、汝南の街道を疾走していた。

汝南、そこはかつて袁家の本拠地だつた場所である。

袁紹も袁術もそこで育ち、一時は袁術がそこを治めていた。だが、その日と未来にしか田もくれない劉備にそんな事は知る由もない。

「兄貴、霧が出てきたぜ！」

さつきまであんなに晴れていたのに、気がつけば劉備たちの周りを白い霧が覆いつつあつた。

「これはいかん……道を見失うなよ！」

二人の義弟に声をかけて、劉備は先の見えない霧の中に突っ込んでいった。

霧がそこから消えた時、三兄弟の姿もまた、霧の「ごとくそこから消えていた。

「うわああーん助けてくれええー」

暗い部屋に、情けない男の泣き声が響く。
血痕めいた汚れが染み込んだ冷たい台に、肥満体の男が一人拘束されていた。

表と裏、二人の袁紹は鏡に写したように同じ姿勢で、その男を見下ろしている。

「つるさい術、少し黙れ」

「泣くことが皇帝の仕事なのか？哀れなものよー！」

両方から、袁紹は容赦なくその男を責め立てる。

この拘束されている男こそ、袁紹の異母弟にして悪夢の元凶の一人、袁術であった。

「全く、おまえが死んでもう何年になると思つていてる?
公孫？もそうであつたが、おまえもたいがい往生際が悪いな」

表の袁紹はあきれたように、台の上でもがく弟に言葉をかけた。
この無様な弟は、死に方が無様であつたばかりか、未だに未練を
断ち切れずに彷徨つっていたのだ。

一時は玉璽を手に入れて皇帝を名乗り、贅沢三昧に遊び暮らしていた。

北でがんばっている兄の事など田もくれず、己の野望に夢中になっていた。

そして気がついたら味方がいなくなってしまい、兄を頼るしかなくなっていた。

袁術を発見したのは、汝南に入つてかつての故郷に足を向けた時だった。

袁術は死した時のままぼろぼろの衣をまとい、一人の味方もなくさまよっていた。

「誰か、誰か水をくれえ……」

お、おれは袁家の当主にしてこの国の皇帝、袁術だぞお……」

袁紹はその姿を見て心底頭を抱えた。

汝南の実家は、すでにだいぶ前になくなっている。

そもそも、袁術が贅沢をしそぎて領土が荒廃したために、袁術自身が一族を南陽に連れて行つたのではないか。

それなのに、今まで庇護を求めて汝南に戻つてくるとは……。

(こいつの頭の悪さだけは、死んでも化けても生まれ変わっても変わりそうにはないな)

(仕方ない、奴は所詮その程度の男だ。

まあ、捕まえて仕置きをしてやるにはちょうどいいではないか…)

裏の袁紹の意地悪な提案に、表の袁紹もうなづいた。

この愚かな弟に復讐したいのは、表も裏も同じ考えだ。

そうして、袁紹はまず己の悪夢に弟の袁術を捕らえた。

それは復讐であると同時に、もう一つ少し卑怯な目的のためにもあった。

「さて、術よ。

これからおまえを殺した者たちが、ここにやつて来るぞー。」

裏の袁紹は楽しそうに叫びた。

「劉備玄徳……確かにおまえは奴に追い詰められたのだらう。
そして味方も食糧もなくなり、行き倒れて死んだ。
私はその後流浪となつた劉備を受け入れたが……私がおまえの事
で劉備を恨むと思つたか？」

裏の袁紹は、凍りつきやうに冷たい視線で袁術を見下ろしていた。
表の袁紹もこればかりは、全く止める気にならなかつた。

幼い頃、ずっとひどい目に遭わされてきた。

大人になつてからも、ずっと心の底で憎んできた。

うわべで仲良くするひとはあっても、心はこの男を許したこと
はなかつた。

裏の袁紹が弟を責めるのを見ながら、表の袁紹はふいに気配を感じて立ち上がつた。

己の悪夢の世界に、異質なものが侵入してきたのだ。

「来たか！」

その声はまるで、神の降臨を見たように喜びに満ちていた。
今この悪夢に入ってきた男こそ、袁術の仇であり万民の救世主、
劉備玄徳である。

劉備／汝南の街道にて（後書き）

劉備玄徳は仁徳を旗印とし、天下万民を救うことを目標にかかげる人物です。

袁紹は自分を救つてもらうために、天下の救世主になろうとする劉備を悪夢に招きました。

しかし、劉備は生前の袁紹にとつてよくないこともしでかしている諸刃の剣です。天下の救世主は袁紹を救うことができるのか、これまでとは違った流れで新章スタートです。

劉備～霧の中に（一）（前書き）

袁紹はついに生きた人間を悪夢に引き込むようになり、最初の客として劉備玄徳を選びました。

袁紹と劉備の間にはいくつか因縁がありますが、実際に劉備が袁紹の側にいたのは非常に短い時間です。そのため、劉備は袁紹のことを公孫？以上によく知りません。何も知らない劉備が袁紹の悪夢を前に何と思うのか、それもこの章の鍵となります。

劉備～霧の中に（一）

「どうだい……」

劉備はゆっくりと馬を止めて、後ろを振り返った。
霧の中に、かすかに大柄な影が浮かぶ。

「関羽、張飛、固まつて歩こいつー。

この霧では、もはや馬で移動するのは危険だ。」

「分かつた、兄者！」

劉備はひらりと馬から下り、霧を搔き分けるように一人のもとへ歩いた。

一面白い視界の中、行き先に手を伸ばして探りながら歩く。
不意に、その手が温かい別の手に触れた。

「兄貴！」

それは、張飛の手だった。

そのうち張飛の側にいた関羽も姿を現し、三人はほっと一息つい
た。

いくら戦場を渡り歩いてきた劉備とはいえ、ここまで異常事
態は初めてだった。

馬に乗つて走っているだけで、バラバラにされそうな霧の迷宮

……。

昔黄巾賊討伐で相手にした妖術使いでも、ここまでしなかつ
た。

劉備たちはとりあえず、馬を近くの木につないでそろそろと歩き始めた。

「どうかに民家でもあればよいが……」

不安げにつぶやく劉備の両側で、关羽と張飛が霧の中に目をこらす。

武器を前に伸ばせば先端がかすむほど、その霧はすさまじかつた。武器を前に伸ばせば先端がかすむほど、その霧はすさまじかつた。武器を前に伸ばせば先端がかすむほど、その霧はすさまじかつた。武器を前に伸ばせば先端がかすむほど、その霧はすさまじかつた。

ただ白く、何も見えない。

明日をも知れぬ状況に慣れている劉備たちも、さすがに気味悪さを覚えた。

湿った空氣に、三人の足音だけが響く。

歩けども歩けども真っ白で、本当に自分達が移動しているのかすら分からなくなってくる。

不意に、霧の中に犬らしき遠吠えが響いた。

「おお、人がいるのかもしれぬ！」

久しぶりに聞いた自分たち以外の音に、劉備の表情がぱっと明るくなつた。

犬はだいたい人里にいるものである。
この犬が自分の居所を他の者に知らせてくれるかもしれない……

劉備の足は自然と、その声が聞こえた方に向かつていた。

肌を撫でて流れる霧を搔き分けて、劉備たちは歩いた。

犬の声は、だいぶ近くなつてきた。

「关羽、張飛、見落とすでないぞ！」

二人の義弟に注意を促して、自らも霧の中に田をじりす。すぐ数メートル先で、おうおうと吼える声がある。それは、喜びを感じさせる声だつた。

突如、霧の狭間に黒い影が映つた。

形は確かに犬のようで、こちらを見て尻尾を振つてゐる。

その影が、突然劉備に向かつて走り出した。

「あつ！？」

劉備が向き直る間もなく、犬は劉備に向かつて突つ込んでいく。そして大きく飛び上ると、口が裂けたかと思えるほどの大口を開けた。

まさか攻撃されるとは思つていなかつた劉備には、身をかわす余裕などなかつた。

その瞬間、劉備の耳元でぶんつと風を切る音がした。

「おりやああ！」

犬の牙より早く、張飛の蛇矛が犬の頭をかち割る。犬はきやいんと情けない声をあげて、ビサリと地面に転がつた。

「おお、助かつたぞ張飛！」

戦闘でこの一人に助けられるのは、劉備にとつてよくあることだ。

しかし、それでもいちいちお礼を言つのを劉備は忘れない。
それもまた、劉備の徳によるものだ。

その言葉一つで、関羽と張飛はこれからも劉備に頼べやうとう氣になる。

「へへっ兄貴の相手はあんな獣じやねえだろ？」

張飛が照れたよつに鼻をこすりながら言つ。
だが、そのほがらかな義兄弟のひと時は、そう長くは続かなかつた。

「兄者、これは……」

関羽が、柄にもなく困惑した声を漏らした。

劉備と張飛が振り向くと、関羽は青ざめた顔を上げた。

関羽の足元には、たつた今倒した狂犬が転がっている。

「どうした、関羽？」

劉備は少しいぶかしんで、関羽に歩み寄った。

「歩進む」と、霧のベールがはがれて狂犬の姿が露わになる。

「ああっ！――？」

その狂犬の真の姿を目にしたとたん、劉備は思わず悲鳴を上げた。

有刺鉄線がからみつき、血にまみれたいたましい皮膚。目があるはずの場所には有刺鉄線が生えているのみで、目がそこについた痕跡はない。

口は、普通の犬の口をせらりと上下に無理矢理引き裂いたように裂けていた。

明らかに、普通の犬ではない。

いや、この世のものと思えない。

劉備はこの未知なる恐怖に、一瞬氣圧されて立ち尽くしてしまつた。

「何だよ、これ……？」

張飛があっけにとられたようにつぶやく。
しかし、答えられる者はいない。

劉備たちのうち、誰一人として今までこんな生き物を見たことがない。

妖怪や妖術の話を聞いたことはあっても、現実に目にすることはこれが初めてだ。

劉備の背筋を、ぞつとする何かが駆け抜けた。

まるで自分たちが、今まで自分たちがいたのとは全く別の世界に迷い込んでしまったような……。

霧の中から、また不気味な唸り声が響く。

劉備は周りを固めている一人に、できるだけ落ち着いた声で指示した。

「关羽、張飛、一層警戒してくれ。」

霧が晴れるまで、氣を抜くでないぞ…」

元来た道を戻れないのは、もつ分かっている。

真っ白に視界を遮る霧は、もはや方向感覚すらも奪い去っていた。

だつたらとにかく歩いて何かを見つけ、機に応じて対処するまでだ。

冷たく湿った霧が、劉備のほおをいとおしむよつに撫である。

その感覺に思わず小さく身震いして、劉備は霧の中に踏み出しだ。

劉備～霧の中にて（一）（後書き）

劉備が袁紹のことを知らないよ、袁紹もまた劉備のことをよく知りません。ただ、劉備が行く先々で人々に歓迎され、民を救うという信念のもとに行動していることくらいは耳に入っています。だから袁紹は「救つてもうづ」「ひらぎ」という目的のために劉備を選んだのですが…それがどのような結果になるかは、読み進めてのお楽しみです。

劉備～霧の中にて（2）（前書き）

今回は劉備たちが生きた人間であるところだけではなく、袁紹側の目的も前回までとは異なっています。

公孫？ 地獄の力を使う肩慣らし

袁譚 救いへの希望を捨て切れないが、主たる目的は復讐
それに対し、劉備は初めから救つてもらうのを主目的に招いています。そのため、袁紹自身の対応も、これまでとは異なったものになるでしょう。

劉備／霧の中に（2）

表の袁紹は、期待に満ち溢れた顔をしていた。劉備がこの呪われた世界に足を踏み入れてくれただけでも、素直に嬉しかった。

「さて、わしは行くべ。
あやつをここに案内せねば！」

軽やかに腰を上げて、いそいそと扉に向かう。
そしてにわかに振り返ると、哀れな弟に向かつて言い放った。

「くくく……おまえと見比べれば、わしでもそれなりに良い君主に
写るだらうな。
特におまえを倒そうと息巻いていた劉備なら、なあさう……。
おまえはわしを貶めた償いに、わしが救われるための生贊になる
のだ！」

途中から、言葉は裏の袁紹に引き継がれていた。

だが裏の袁紹は表とは違い、どこか不安げな顔をしていた。

「……あまり救いに期待するなよ、人は裏切るものなのだ」

去っていくもつ一人の自分を気遣い、裏の袁紹はため息をつく。

劉備はきっと、子供を怪物から助けるとは思つ。

だが、それが本当に自分の救いにつながるかどうかは、まだ分からぬのだから。

劉備たちは霧の中を進んでいた。

時々現れる狂犬は、関羽と張飛が速攻で始末してくれる。しかし、人型の怪物が現れた時は少々戸惑つた。

影が人でなければ、躊躇なく攻撃できる。

しかし、人型の影が近付いてきたらそうはいかない。

「恐ろしい……私は未だに、これが人ではないと確信を持てぬのだ」

足元に転がる人型の怪物を見下ろし、劉備はかすかに震える声で漏らした。

壊れた人形のように手足をあらぬ方向に向けて、それは横たわっていた。

血の氣のない肌を上品な着物で覆い、その姿は一見良家に仕える召使を思わせる。

しかし、その顔面には頭の後ろまで突き抜ける長い釘が打ちつけられている。

頭を釘で打ちぬかれて動いているなど、明らかに人間ではない。それでも、劉備はそれが人間ではないかと思わずにはいられなかつた。

感じるのだ。

この召使の足運び、息遣い、そして衣装の衣擦れに。

この召使は実際に誰かに仕えて、人として生活していたのだと。

「……ともかく、一つはっきりした事がある

恐怖に乱れかけていた息をどつにか整えて、劉備は一人の義弟に言った。

「このよつなものを放置しては、民が危険にさらされる。これが元は人間だつたならなおさら、放つてはおけぬ。もし我々にどうにかできるものならば、これの元は世のために退治するべきであろう」

「そうですな」

关羽と張飛も、至極真面目な顔で同意した。
民を守り世を平和に導く、それが劉備たちの搖ぎ無き行動理念なのだ。

劉備は、自分が盜賊に襲われたときも、近辺の民のことを考える人間だ。

今自分が相手にしているものが民のためになるかならないか、それが彼にとっての判断基準といつてもよい。

「ちつ、それにしても、ずいぶんと悪趣味な怪物だぜ。

こんなのを生み出した奴は、きっと大層悪い奴なんだろ?」

怪物の死体に唾を吐きかける張飛をたしなめながら、それでも劉備はうなずいた。

こんな怪物を生み出すような輩は、間違いなく民を苦しめる。ならば自分は、そのよつな存在から民を守らねばならない。

たとえ何か事情があつたとしても、巻き込まれるかくの民のことを思えば……。

そんな事を考へてゐる劉備の耳に、早速助けるべき者の声が響いた。

「た、助けてえ！！」

まだあどけなさが残るような、少年の悲鳴だ。
ゆるゆると流れる霧の向こうから、小さな足音と共に聞こえてくる。

劉備はすらりと剣を抜き、さっと身をひるがえした。

「行くぞ、一人とも！」

劉備の凛々しい声に従い、関羽と張飛もそれに続く。
やることとは一つ、悲鳴の主を助けることだ。

「うわああん……」

真っ白な霧のベールを裂いて、少年が飛び出してきた。
そのすぐ後ろから、例の狂犬が姿を現す。

劉備は素早く少年の前に出てかばってやり、同時に關羽が狂犬を
一刀両断にした。

犬の体をとつまいている有刺鉄線が切れ、鉄の棘が犬の体をさら
に引き裂く。

劉備はそれに吐き気を催しながらも、そのおぞましい光景から
少年を守つてやつていた。

狂犬にとどめを刺すと、劉備は腕に抱え込んでいた少年をゆるゆ
ると放してやつた。

少年の不安げな瞳が、おずおずと劉備の顔を見上げる。

「大丈夫だよ、私は人間だ」

劉備は開口一番、優しく、はつきりとした口調で少年を安心させてやつた。

それで少し落ち着いたのか、少年は劉備の腕にしだれかかるようにして小さく息を吐いた。

劉備は脱力した少年の背中を、温めるように撫でた。

「もう心配することはない、私がおまえを守つてやる。この化け物どもにおまえを食わせたりはしない！」

劉備がそうやって声をかけても、少年は相変わらず不安そうなままだつた。

「本当に……？」

少年が、か細い声を発する。

劉備が視線を合わせるようにかがんでのぞきこむと、少年はまだ信じられないといつぱりつぶやいた。

「本当に、守つてくれるの？
この地獄から、ぼくを救つてくれるの？」

「ああ、助けるとも」

劉備は陽光のように暖かい笑顔で、少年の間に答えた。
それを聞くと、いままでずっと怯えていた少年の顔が少しだけ和らいだ。

それは、劉備にとつてこれまで何度も繰り返してきた行為だ。

劉備はこれまで、たくさんの虐げられた子供たちを見て、励ましつきた。

戦で親を失つた子供、圧政に苦しむ民の子供、働きど働きど樂にならない歪んだ社会の小さな犠牲者たち。

そんな子供たちはだいたい、こんな不安そうな目をしていた。

(かわいそうに、救つてやらねばー)

そう、これはいつもと同じ、民を救う行為だ。

民は自分たちに世直しを期待し、守つてもうことを望んでいる。ならば、救世主たらんとする自分たちにはそれに応える義務がある。

劉備は優しい眼差しに強い決意をこめて、顔を上げた。

劉備～霧の中にて（2）（後書き）

劉備は基本的に民に優しいので、少年の姿をとつた袁紹を優しく受け止めてくれました。しかしこの時点で、劉備はそれが袁紹だと分かっていません。

果たして劉備の優しさは、それが袁紹であると分かつてからも続くのでしょうか？

劉備～霧の中に（3）（前書き）

劉備が前の二人と異なる点は、優しいだけではありません。

劉備は一人ではなく、関羽と張飛と一緒に戦ってくれるのです。その二人が一騎当千の豪傑であるせいで、劉備たちは多少の怪物ではびくともしません。チートといえるくらいの強さで、倒せるものであれば軽く蹴散らしてしまいます。

そのせいで、今回のエンディングは前章とはなかり異なる予定ですが…。

劉備「霧の中にて（三）

「とにかく、どこか安全な場所を見つけた方がよさそうだな

関羽が、霧の中をにらみながら言った。

劉備も、少年を抱き寄せるようにしてうなづく。

「うむ、我々だけならまだ何とかなるが、この子をどこかに避難させなければ。

かといって、この霧の中建物も容易に見つかるまい。

安全な場所が見つかるまで、この子を守つて歩くしかあるまい」

「ちつ、しようがねえな！」

張飛のその答えに、少年は少しだけ安堵した表情を浮かべた。
だが、その奥にあるかすかな嫉妬の眼差しは、霧のベールに隠れて劉備たちには見えなかつた。

劉備たちは、しばらく霧の中を歩いた。

三人で子供を守るように囲み、子供に歩調を合わせて進んでいく。

まさに、民を守る君主の鑑だ。

「大丈夫か、辛いなら休んでも良いぞ」

時々、こんな優しい言葉までかけてくれる。

少年はそんな劉備の愛情に、照れたようなすまなさそな微笑を浮かべた。

今まで、自分が子供の時にこんなに優しくしてくれた人間がい

ただろうか。

こんな風に心を温めてくれる人間が……。
自分が知っているのは、その逆の方が多かつたのに。

(ああ、やはり世の評価は間違つておらぬ。
この男は、優しい……！)

少年の手が、きゅうと劉備の手を握った。
劉備はそんな少年を抱きかかえるように、歩みを止めて前を見据
える。

「大丈夫だ、必ず守つてあげるからね」

劉備の視線の先には、やらやらと近寄つてくる怪物たちの姿があ
つた。

関羽と張飛が、得物を構えて前に出る。
先頭にいた犬の怪物が、霧を裂いて飛び掛つた。

「いくぞ張飛！」
「おう、兄者！」

勇ましいかけ声とともに、まずは張飛が鋭い突きで狂犬を打ち払
う。

狂犬は何匹も襲い掛かってくるが、張飛は落ち着いた表情でそれ
ぞれを空中で打ち落としていく。

犬の後から歩いてくる人形は、関羽が偃月刀で一気になぎ払う。

しかし、怪物が来るのは前方だけではない。

少年を守る劉備の背後から、霧に紛れて人形が忍び寄る。

「危ない！！」

ふいにすぐ後ろで響いた金属音に、少年ははっと顔を上げた。振り向くとそこには、人形の振り下ろす包丁を見事に受け止めている劉備の姿があった。

だが、直前まで気付かなかつたらしく体勢はよくない。受け止めてはいるものの、これでは反撃できそうもない。

突然、劉備は剣を持つ手を片方放した。そして田にもとまらぬ速さで鎧の下に突っ込み、隠し持っていた短剣を抜き放つ。

「へりえつーー！」

相手の攻撃を止めたまま、劉備は人形の懷に短剣を突き立てた。哀れな人形はか細い悲鳴を上げ、その場に崩れ落ちるしかなかつた。

数分後、怪物たちは皆地面に伏して動かなくなっていた。

「ほら、もう大丈夫だよ」

劉備は柔らかな微笑みを浮かべて、少年の頭を撫でる。それにつられて、少年の顔にも自然と笑みが広がる。

「おじさん、強いんだね！」

そう、劉備たちは強い。

劉備一人ではそう強くもないのかもしねりが、关羽と張飛とい

う豪傑が常に守ってくれている。

一人一人の強さが、絆によつてからみ合い何倍もの力を發揮する。

その絆が、まぶしく、そして羨ましかつた。

もし自分もそこに混ぜてもらえたなら、きっと救われるような

気がした。

「おじさんは、ぼくを救つてくれるよね……。

この地獄から、助けてくれるよね……」

期待に田を潤ませた少年の間に、劉備は自信たっぷりに答えた。

「ああ、必ず助けてあげるからね。

決して、君を見捨てたりしないよ」

血と膿と鏃にまみれた世界で、裏の袁紹は少しだけ顔をしかめた。

(むう、あの数をいとも簡単にこなすとは……。

さすがに玄徳は前の二人とは違うな)

迎えにいつた自分を拾つたところで多數の怪物に襲わせるのは、相手の覚悟を試す試練のようなものだ。

これまで、公孫?も袁譚もそこで自分を放り出して逃げている。ここで違つ反応を見られたというだけで、袁紹の心は大きく揺らいでいた。

もし、本当に劉備が他の一人とは違う結末を見せてくれるなら、

もし、劉備が自分を地獄から救い出してくれるなら、この楽しい復讐劇もすぐ終わりになるかも知れない。

(全く、寂しいものだな)

暗い感情の塊である裏の袁紹にとつて、今の状態は復讐の絶好の機会だった。

自分が救われてしまえば、袁紹は結局生前にためた恨みを晴らせないまま終ることになる。

表の袁紹には悪いが、それは少しもつたいたいない気がした。

それに……正直、袁紹が劉備に対して抱いている感情はいいものばかりではない。

特に、劉備が一人の豪傑を従えているところを見ると、胸を焦がす業火のような感情がせり上がつてくる。

かつて、袁紹の側にも一人の豪傑がいた。

袁紹は彼らを、心から信頼して支え合っていた。

それを奪つたのは……。

あの時のこと思い出すと、今すぐにでも劉備を殺しに行きたくなる。

しかし、それでは自分は救われないのだ。

今はこの感情を抑えて、自分を救つてもらわなくてはならない。

(まあ、仕方がないか……わしとて地獄に落ちるのを望む訳ではない。
劉備がわしを救えるというのなら、なるよつに任せらるか)

今の袁紹にとって、劉備は久しぶりに見た大きな希望だ。

自分を救ってくれるならそれほど妨害はすまいと、裏の袁紹は闇の中で静かに思った。

劉備～霧の中に（3）（後書き）

劉備の態度が優しいと、袁紹の態度もそれに応じて優しくなります。

裏の袁紹は怪物の出現をある程度制御できるため、裏の袁紹の敵意を弱めることができれば怪物は少なくなります。袁譚の時とは正反対の現象です。

ただし、裏の袁紹は暗い感情の塊であるため、その敵意や疑心を完全に取り去ることはできませんが。

劉備～霧の中にて（4）（前書き）

袁紹は今回もまた、劉備たちを悪夢の館に招きます。

今回の館は前一章のどちらとも異なる場所で、前章とはまた別の悪夢がこめられています。しかし、この場所にこめられているのは、悪夢ではあっても袁紹にとって非常に大切な感情です。

そしてその感情をあえて劉備たちに見せることで、袁紹はより確実に救つてもうおうとするのですが…。

劉備／霧の中で（4）

それから、劉備たちはあまり怪物に遭わなくなつた。
まるで何かが導いているように、前方の霧が時折薄くなる。

「あ、兄者！今、建物が……！」

張飛が叫んだ。

濃淡をつけてたなびく霧の隙間に、黒い楼閣の影がちらりとのぞいた。

よく目をこらすと、いつの間にか道の両側にも建物が見える。

どこからともなく、一陣の風が吹いた。

とたんに霧が透けるように薄くなり、周りの建築物が姿を現す。

そこは、華やかな廓が立ち並ぶ、花街のような場所だった。
いつも美女が男を呼び込むはずの窓は閉まり、入口も全て固く閉ざされているものの、

そこは間違いなく、男が欲を満たすために存在する街の形をしていた。

「遊郭か……」

劉備は霧に紛れて、困ったよつなばつが悪そうな顔をした。

劉備も若い頃は、学問の傍らで時々こいつこいつとここで遊んでもいたのだが……。

民を救い義を掲げる今の劉備にとって、こいつはあまり好ましい場所ではなかつた。

立ち止まつてしまつた劉備をよそに、少年は突然すたすたと歩き出した。

「あ、おこ、どこ行くんだよー?」

張飛が慌てて止めたが、少年の足は止まらない。揺れる霧の中に突き進みながら、少年はぽろりと口にした。

「お母さんがいるの」

「お母さん?」

張飛が聞き返すと、少年は前を向いたまま答えた。

「うん、ぼくを産んでくれたお母さんだよ。育てくれたお母さんじゃないよ」

その言葉から、劉備はどうにか少年の生い立ちを悟った。
この子は、この遊郭にいる女の子供なのだ。
そしていつもはここから離れたところで、母親と別れて育っていたのだと。

霧の向こうに、ひときわ高い屋根が見える。

黒い塔のようにそびえるそれは、おそらくこの街で一番高級である樓閣の影だった。

大通りの突き当たりに、その門はあった。

これほどの異常事態にも関わらず、門は開きっぱなしになっていた。

そして誰か大事な人を迎えるかのように、きれいに掃き清められる。

そして誰か大事な人を迎えるかのように、きれいに掃き清められる。

てこる。

「お母さん……」

子供とは思えないほど感慨深げに、少年はつぶやいた。

よほど会ったかったのだらう。

少年は田にも留まらぬ速さで門の中に飛び込んでいった。

「あつ待て、一人では危険だ！」

关羽が止めるのも聞かず、少年は楼閣の中に吸い込まれていく。劉備たちも慌てて、少年を追つて門の中に駆け込んだ。直後、劉備たちの背後で門が勢いよく閉まった。

確かに、外にも中にも誰もいなかったのに。

門はまるで意志があるよう、一瞬で固く閉ざされていた。

「ちよ、何だよこれ！？」

張飛が慌てて門に手をかけ、体重をかけて力一杯押す。だが、門は微動だにせず、きしむ音すら立てない。

「これは、閉じ込められた……のか……？」

劉備は啞然としてつぶやいた。

「罷、だつたのかもしだせぬな」

关羽がため息とともに漏らした。

劉備はじつそっと肩を落として、心の中で最初からを振り返ってみた。

確かに、少しおかしかったのかもしれない。

こんな異常事態のただ中に、他の人が誰もいないのにあんな子供だけがいて。

拾つたとたんに大量の怪物に襲われて、子供についてこの楼閣に引き込まれて。

だが、それでも目に前に困つた人間が現れると放つておけないのが劉備の性分だ。

これまでにも、そうやって情に訴えられてはめられたことはそれなりにある。

よく考えれば今回もその繰り返しかど、劉備は唇を噛んだ。

自分には悪意なんてなかつたのに、いつの間にか命を狙われていた。

そういう事は、劉備の人生の中で何度もあった。

例えば、徐州で呂布を受け入れた時。

例えば、曹操の配下として都に凱旋した時。

ちょっと前、河北の袁紹の元にいた時もそれに近かつた気がする。

「いい加減、私も学ばねばならぬか……」

守つてくれる関羽と張飛のことを思つて、劉備は静かに自分に言い聞かせた。

「とにかく、出られぬ以上にこにいても仕方がない。」

今はこの廓を調べてみるしかあるまい

劉備はそう言って、霧にかすむ楼閣を見上げた。
关羽もそれに答えて、青龍刀を握りなおす。

「やうですが、我らをここに引き込んだといつ事は、怪異の元凶はここにいるはず。

元を断てば、この怪異も治まるでしよう」

三人はうなずき合って、妖氣漂う楼閣に足を踏み入れた。

楼閣の主がどんなつもりでこの門を開いたのか、その訳を完全に履き違えたままで。

劉備～霧の中に（4）（後書き）

劉備は一時的に袁紹のもとにいましたが、結局いづらくなつて劉備の方から袁紹を欺いて出ていくという結果に終わっています。

そのため、劉備は袁紹という人物にあまりいいイメージをもつていません。

表向きは穏やかでも、すぐ人を疑いあらぬ罪を着せようとする…なぜ劉備があらぬ疑いをかけられたかは、後に語られます。三国志ファンの方なら、すでに知っているかもしれません。

劉備／愛惜の館にて（一）（前書き）

新たなフィールドで、新たなクリーチャーが出現します。遊郭を思わせる館に出現するそのクリーチャーを見て、劉備たちは何を思うのでしょうか。そしてそれは、袁紹のどのような悪夢を象徴しているのでしょうか。

劉備／愛惜の館にて（一）

楼閣の中は、相変わらず静かだつた。

怪物はいるが、外よりは少ない。

部屋にはきれいな調度品が並べられ、そこにいたであろう遊女の生活感すら感じられた。

美しく整え、活けられた花。

一般的の娼婦とは一線を画する、上品な品の数々。

ただ、それは全くといっていいほど人間のもので、劉備たちが想像した妖怪じみたものではなかつた。

女さえいればいつでも客を迎える優美な雰囲気が、そこにはあつた。

「母上——！」

突如として、さつきの少年の声が廊下に響いた。

驚いた劉備たちが部屋から出ると、少年が廊下の角を曲がっていくのが見えた。

「どうする、兄者？」

「追うぞ、手がかりはあれしかない！」

張飛の間に短く答えて、劉備は少年を追つて走つた。

そして角を曲がつたとたん、今度は急に止まるはめになつた。

そこにいたのは少年ではなかつた。

人間でもなかつた。

外にはいなかつた、新種の怪物だ。

柔らかそうな肌に包まれた歪な肉塊。

そこから、4本の手と4本の足が突き出している。
よく口をこじらして見れば、一人の人間がかくみあつてゐるかの
よつな……。

それを田にしたとたん、劉備は吐き氣を覚えて口を押された。

だが、その反射は正しかつた。

怪物はこぢらに気付くや否や、体の前面にある口からべたべたの
粘液を吐き出してきた。

「ぶえつ何だこれ！？」

その攻撃は意外に遠くまで届き、关羽と張飛も顔面にそれを食ら
つてしまつ。

特に毒はないようだが、気持ち悪いことこの上ない。

威力はなくとも、こんなものを食らつてひるまない者は滅多にい
ないだろ？

「大丈夫か、二人とも。
次が来る前に仕留めるぞ！」

劉備は怪物に向かつて走りこみながら、すらりと右手で剣を抜いた。
同時に、左手を鎧の中に突っ込み、もう一本の短剣を抜き放つ。

雌雄一対の剣による二刀流、これが劉備の戦い方だ。

「どけつ！？」

動きののろい怪物の、まずは足を薙ぐ。
重そうな体から足を2本切り落とすだけで、怪物の動きは格段に悪くなる。

それを補うかのように、突き出した手の一部が床についた。

それでもまだ、怪物には三本の手がある。
一本を一刀でしのこても、その間をぬって一本の手が劉備をつかむ。

「くっ！？」

たった一本なのに信じられない力の強さだ。
決して放さぬともいうように、劉備を無理矢理に抱き寄せる。
歪な胴体の肌に、突如として鋭い歯の生えた口が現れた。

「あっ……」

劉備は大きく目を見開いたが、もう自力で反撃できる体勢ではなかつた。

思わず顔を歪めた劉備の耳元で、風が唸つた。

ぞばっと肉が裂け、血潮が飛び散る。

劉備がほおに風を感じた時には、怪物はきれいに一つの肉塊になっていた。

「兄者、『無理はやめたださ』」
「ああ、すまぬ関羽……」

心配そうに顔をしかめる関羽の前で、劉備は心底すまなさそうな顔をした。

また、情に流されて罵にはまり、助けられてしまった。

自分は一体何度もこれを繰り返すのだろうと、劉備は自嘲した。

「で、どうするんだ、兄者？」

一人に水を差すように、張飛が口を挟んだ。

張飛の視線の先には、廊下に点々と続く足跡がある。

「これを辿つてこきや、あのガキんじに行けるかもしれないぜ？」

劉備は着物の汚れを払つと、気を取り直して前を向いた。

「行こう、我々には民を守る義務がある。

たとえ罷であろうと、この先に潜む魔物は倒さねばならぬ

劉備は、足跡を辿つて歩いた。

怪物は意外なほど少なく、遠くに見つけたものは襲つてこないこともあった。

それが逆に、不気味に思えてくる。

「へへ……うへうへうへ……」

突然、誰もいない廊下に子供の泣き声が響いた。
声は、さつきの少年にさつくつだ。

「会わせて……母上に会わせて……」

劉備たちが黙つて聞いていたと、声は劉備たちの側から少しづつ遠ざかっていく。

それに呼応するよつこ、かすれていた足跡が急に鮮明に浮かび上がる。

きれいに磨かれた床に、濡れたような足跡がぽつぽつと続いている。

足跡の周囲には、まるで姿の見えない少年が泣いた跡のように小さな飛沫が散りばめられていた。

異かもしないと思つても、劉備の心はちくちくと痛んだ。

この怪異は魔物のものでも、この痛みは人間のものであるよつこを感じられた。

だとしたら、少年はただ、無念を利用されているだけかもしれない。

(じゆうじゆ、まずは正体を見極めねば)

劉備は姿なき声について、楼閣の階段を登つていった。

劉備へ愛惜の館にて（一）（後書き）

裏の袁紹が心を落ち着けているため、今回は怪物たちがあまり積極的に襲ってきません。袁紹自身が、劉備を受け入れようと努力しているからです。

しかし、逆に劉備はその意図を計りかね、これまでの「自分に悪意がなくても害された」経験からいつもより疑い深くなってしまっています。

果たして、袁紹は劉備に事情を聞いてもらえるのでしょうか。

劉備へ愛惜の館にて（2）（前書き）

この館でもこれまでの館と同じ、時を超えた手紙などにて袁紹の悪夢が語られます。

劉備たちを導くよつて響くすすり泣きと涙の跡は、袁紹の幼少時の悲しみがにじみ出たものです。この悪夢の中で、袁紹は誰にどのような感情をもつて泣いているのか、館の名前もヒントになっています。

劉備／愛惜の館にて（2）

足跡は、ある部屋の手前で止まっていた。
最初に关羽が少し扉を開けてのぞいたが、怪物の姿はなかつた。

「大丈夫です兄者、ここは安全です」

入つてみると、そこは廓にふさわしくないほど上品な部屋だつた。

飾り気の無い木彫りの机。

その周りには書物と子供の玩具が置かれている。

まるでそこだけ、良家の子供部屋を切り取つて貼り付けたよう
な感じだ。

机は、それ自体は磨かれているにも関わらず、墨で盛大に汚され
ていた。

もう少し近付くと、劉備にはそれが意味のある言葉だと分かつた。

「お母さんに会いたい！」

本当に、ぼくを産んでくれたお母さんに会いたい！

あのおばさんをお母さんと呼ぶのはもう嫌だ！

「これは……？」

あの少年が、書きなぐつたのだろうか？

それを考へる間にも、今度は部屋の外からすすり泣く声がした。

「会えない……まだ、会えない……」

でも、信じています。こうしてがんばっていれば、きっとといつか

会えるって……。

だから私は、その日を信じて、針のむしろの日々を渡つていけます」

さつきより、いくぶん大人びた声だった。

さつきの少年が、もう少し聞き分けのよい年になつたような……。

「成長している!？」

驚いた劉備たちが部屋から出ると、そこにはまた新たな足跡があった。

その足跡は、さつきより明らかに大きくなつていた。

「やべえな、兄者……。

これつて、早く捕まえた方がいいんじゃねえか?」

「うむ、事態が進行しているなら急いだ方が良い」

关羽と張飛にせかされて、劉備は再び足跡を辿り始めた。
しかし、その足取りにはわずかながら迷いが生まれていた。

成長した少年の声に、劉備は既視感を覚えたのだ。

(私は、以前あれと会つている!?)

幼い面影だけでは分からなかつたが、声は琴線に触れるものがあつた。

劉備は確かに、あれに近い声で話しかけられた記憶があつた。

ふと、劉備の脳裏に城内の風景が浮かんだ。

外は真っ白な雪に埋もれている。

火を焚いていても底冷えのするような寒さの中で、

その人はどこか影のある柔軟な笑みを劉備に向けて……。

あれは誰だったのだろう？

確かに自分は、この子に似た声を知っているのに。

さつきより大人びた声は、確かにその時のものに近い。しかし、劉備はそれが誰であるかを思い出せなかつた。忘れた、というより、その人物自体にあまり感銘を受けなかつたのだろう。

（やれやれ、曹操殿くらいの人物ならば、すぐ思い出せそうなものだが……）

劉備は心の中でため息をつきながら、足跡の続く次の部屋に入つた。

その部屋のつくりは、さつきの部屋とよく似ていた。いや、つくり自体は全く同じで、ただ置かれているものが異なつていた。

玩具はなく、書物が多くなつていてる。

机は高くなり、きれいな絹張りのいすが加わつていてる。

同じ部屋で、しかし主が成長したような、そんな感じだつた。

机の上に広げられた紙に、またも母を想う文章が書き残されてい

る。

「母上、お元氣でお過ごしでしょうか？」

私は、新しい母上のものとで元気に過ごし、この名家に恥じぬよう学問に励んでおつます。

いつか私の身が自由になるその時がきたら、必ず会いに行きます

♪

いかにも良家の子息らしい、きれいな文字だった。
さつやの殴り書きと比べて、心にも余裕ができたようだ。

劉備は、このきれいな文字にも見覚えがあった。
そんなに昔ではない、近年のことだ。

戸惑つ劉備の耳に、またしても部屋の外から声が聞こえる。

「なぜだ……なぜ会つことすら許されぬ……？」

私は、あなたに会うことだけを楽しみに生きていたところだ。いくら頑張つても、この気持ちが報われることはないということか

……

今度は、もうほんと大人の声だ。

その声を聞いたとたん、劉備の脳裏に同じ声の記憶が浮上した。

よく参られた、この はおまえを歓迎する。
ゆること休まれよ。

同時に鮮やかに見えてきた面影に、劉備はよつとして身をこじめ
わらせた。

(そんな、まさかあの方が！？)

劉備は一瞬思い当つたその人物を、即座に否定した。

(有り得ない、そんな訳がない……。

あの人は名門の嫡子、そのようなそぶりは一切なかつたし、あの話はテーマだつたはず）

その人物が実は妾の子、娼婦の子であるといつ噂は聞いたことがあつた。

だが、本人とその周りはそれを否定していだし、噂の出所を考えるととても信用できる話ではない。

それにその人物はいかにも良家のお坊ちゃんで、見るからにこんな苦しみとは縁のなさそつた人間だった。

「これは何かの間違い、いや虚構の罠だ。

こんなものに心をからめとられてはいけない。

劉備はしつかりと氣を持ち直して、再び部屋を出て足跡をたどつた。

足跡はやはり、大人の足の大きさになつてゐる。

関羽と張飛はそれを見て、ますます険しい顔になつた。

「やつぱり成長してるぜ、兄者」

「つむ、魔物の住処に近づいているのだらう」

劉備は声で答えることなく、わずかにうなずくだけにとどめた。足跡を見れば二人の言つことは正しい、しかし劉備にはどうも解せなかつた。

階段を上り、足跡の主の居場所に近づくにつれて、むしろ空気が

澄んでこくよくな氣がした。

まるで、彼ひとつ聖なる何かがそこにあるようだ。

劉備～愛惜の館にて（2）（後書き）

劉備たちは袁紹の生前、あまり袁紹のことを気にかけていませんでした。

そのせいで、劉備たち（特に直接会つことがほとんどなかつた関羽と張飛）は袁紹が発するメッセージをほとんど読み取れません。劉備ですら、これが袁紹であるということに確信が持てないほどです。

劉備たちは彼らなりにこの事態を説明しようと一生懸命考えているのですが…。

劉備へ愛惜の館にて（3）（前書き）

劉備が早くも袁紹と対面です。

今回は袁紹の方が早く救われたいと焦っているため、劉備たちはそれほど危機に陥ることなくここまで来ることができました。袁紹も、劉備たちに悪夢を掘り返されたりして傷つくことはありませんでした。

スラスラと進んで終わりも近いよつて思えますが、こんな時ほど落とし穴があるものです。

劉備／愛惜の館にて（3）

よつやくたゞり着いたのは、楼閣の最上階にある一番広い部屋だつた。

しかし、楼閣の持ち主の部屋、といつ訳ではないようだ。そこも他の部屋と同様、女が男をもてなすための部屋だ。

「……」

張飛が息をのんでつぶやく。

おれらの部屋に、怪異の元凶であるうつ魔物がいる。

「いや、一人とも。

ぬかるなよ！」

劉備はじわりと汗のこじむ手を、扉の取っ手にかけた。

ばん、と勢いよく部屋の扉を開け放つ。

すぐさま關羽と張飛が前進して、部屋の中を見回す。

「おまえは……！」

その広い部屋の窓際に置かれた、豪華なベッドの前に彼はいた。

間違いない、劉備をこの恐ろしい場所に誘い込んだ、あの忌まわしい少年だ。

劉備は今一度、そのままの顔をじっと眺めた。

育ちの良さを感じさせる整った面立ち。

気品さえ感じられる洗練されたしぐさ。

しかしその表情は、どこか意識が遠くにあるよつてつりつりだ。

確かに、この表情は記憶の中のあの人にはっきりだった。
数年前にあの人と話した時、実際にこの身で感じた、まさにその印象そのものだった。

少年は恐れる様子もなく、微笑みすら浮かべてそこに座っていた。

そして劉備たちの姿を見ると、唐突に立ち上がった。

「すまぬ、」このような場所に引き込んだこと、まずは詫びよう

身構える劉備たちに向かつて、少年は意外にも頭を下げた。
彼の声は幼いまだが、口調は明らかに大人のものに変わっている。

「事情あって、誰かの助けが必要なのだ。

それゆえ、危険を承知で呼び込んだ。

何も知らずに恐ろしい目に遭わせたのは、悪かったと思つている」

少年は確かに、すまなさそうな顔をしている。

それでも警戒は解かないまま、劉備は少年に話しかけた。

「あなたは、私を知つていいのですが……？」

「うむ、わしは生前、そなたに会つてある。

その縁をもつて、今少し力を貸してはもらえたんだろうか？」

少年はすがるよつて言つた。

だが、劉備はこれが眞実なのか罷なのか決めかねていた。
それを代弁するよつて、張飛が少年をしかりつける。

「やいやい、人様に何か頼むときはまず自分から名乗りやがれ！
正体を見せねえ野郎をホイホイ手伝つ馬鹿がいるか。

手伝つてほしいなら、てめえの本当の姿を見せてみろつてんだ！」

それを言われたとたん、少年の顔が引きつった。

その反応に、関羽が少年に青龍刀を向ける。

「正体を見せられぬよつては、妖怪と思われても文句は言えぬぞ？」

少年は觀念したよつて肩を落とした。

そして、不安を露わにした田で劉備たちを見上げて告げた。

「分かつた、ならば本当の姿を見せよ。

ただ、そのためにはまた少々氣分の悪いものを見せねばならぬぞ。

……あのようなもの、あなたには見せたくなかつたが……」

少年は大きく息を吸い、ため息をつくよつて口を開き出しだ。
そのとたん、劉備の周りの景色がぐにゃりと歪む。

「何だ！？」

「惑つ劉備たちの前で、ほやけて見える少年の姿が成長していく。

背はすこじと高く、シルエットは品のある立ち姿で、この異変にも全く動じる気配はない。

やはつこの怪異は、この男が起つてみるとみて間違いないだろう。

部屋の床板の表面が劣化してばがれ、血のような汚れが広がる。ベッドの飾りやカーテンは歪み、破れ、まがまがしい形に変わる。

辺りが急に暗くなり、赤みがかつた闇が周囲を覆っていく。

再び視界がはつきりした時、世界はこれまでよつずつと深い悪夢に変じていた。

劉備へ愛惜の館にて（3）（後書き）

館が裏世界に変貌しましたが、今日はこれまでと違つて袁紹に相手を怖がらせるつもりがありません。劉備たちも、それなりに冷静に事態を受け止めています。

今回は間違いなく、これまでとは異なるシナリオになるでしょう。それが良いか悪いかは、別として。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4661w/>

袁紹的悪夢行

2011年11月17日19時14分発行